

麻生路郎★編輯

大正十三年二月三日第三種郵便

昭和十二年二月十五日發行

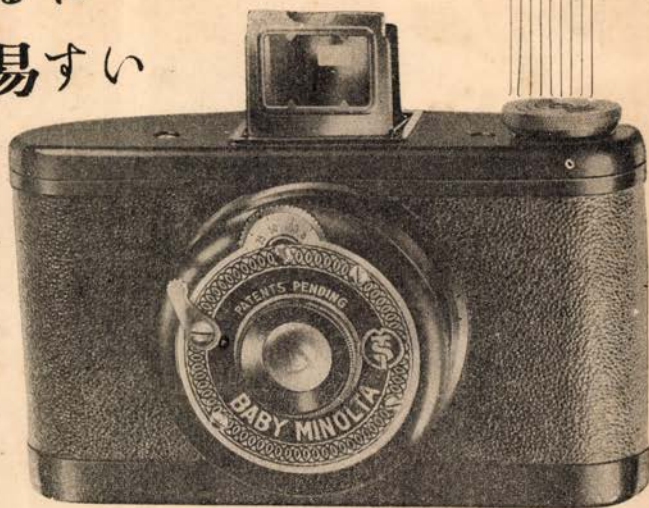
第十四卷第二號 每月一回 十五日發行

川
の
旗
証
物

NO. II VOL. XIV

手に軽
寫し易

ベ
ミ
ノ
ル
タ



¥ 9.50

ヴェスト判兼用
3 × 4cm判

速寫ケース ¥ 2.00

カタログ進呈

淺沼商會

東京市日本橋區室町
大阪市南區順慶町

全國寫眞機店
百貨店にて販賣

誌・雜・柳・川

號二第 卷四十第

「大阪朝日」は世界の「朝日」
 「川柳雜誌」も世界の「川・柳」
 一九三七年からこの意氣で
 進むことにした
 そこで「川・柳」初春川柳會を
 大阪朝日新聞社の三階大廣
 間で開く（二月九日午後六時半）



句作・講演・披講・句の
 漫畫揮毫等があつて川
 柳の春を満喫、十一時
 散會した

×
 壇上から句を披講して
 るのが本社主幹麻生
 路郎先生



川柳雑誌 二月號目次

題字・路郎筆

文 苑

川柳名句評釋……………麻生路郎…(四)

武玉川三編研究(二)……………梅本秋の屋
森東魚…(四)

「武玉川三編研究」を讀む……………穎原退藏…(九)

東京と大阪……………福田山雨樓…(三)

まぢつく・べつど……………麻生葭乃…(八)

花街ルンペン……………たかを・あきを…(四)

橋姫さん……………西田艸樂…(三七)

漫書セク ション **お手輕・避寒**……………小川 幹 武
オサカ・マンガ・トリオ 樋口ヒロム…(四)

川柳指導講座……………塚越正光…(二六)

行路集(短歌)……………長野晴濱…(三)

街に住めば……………高橋かほる…(五)



川柳花道……………水谷鮎美…(二五)

十錢銀貨と僕……………西 いわを…(二五)

ルンペン氏と川柳……………麻生路郎 書…(三二)

川柳今治……………小川武 書…(三二)

川・協の頁……………長野文庫…(二五)

川・柳・横・町……………不死鳥…(三三)

川柳塔……………麻生路郎 選…(三〇)

近作柳樽……………麻生路郎 選…(六)

日本名所名物川柳(京都の巻)……………山川紫明 選…(二三)

一路集腕力……………朝賀大鱗 書…(二三)

「彼氏」と「生字引」……………西村明珠 選…(四〇)

各地柳壇…………………………(四一)

川・柳・書・架(六三)…………………………(四〇)

柳界展望……………社關係の人々……………(四七)

川・雑・案・内……………編輯縦横……………(五一)

編輯縦横……………(四九)



川柳名句評釋

(7)

麻生路郎

箒迄チビて貧しさせまるなり

晃卓

古畳に破れ障子、庭のでこぼこ、暖簾のよれく、何一
つ貧しさを表象せぬものがない。

一萬圓フフンと云つて草に寝る

路郎

金。一萬圓。それがどうしたと云うんだ。空は碧い。雲
は流れる。

むづかかしき顔かな金庫開ける顔

夜王

金庫を明ける顔、たしかにそんな顔があるかも知れぬ。
嚴肅か否、沈痛か否。寧ろ無表情に近い顔かも知れぬ。

この句を讀むと、金に憑かれた人の姿が迫つて来る。

晝線の下で水晶の印を刻り

豆秋

先づ印判屋の薄暗い部屋が想像させられる。そこには晝
線が靜かに垂れ下つてゐる。その下で水晶の印を刻る無表
情な印判師の顔こそは時代を超越してゐる。

螢まで啼いてるやうな虫屋の荷

狸兵衛

點滅に蒼白い夜を思はせられる螢の魅力。夜店の灯から
少しく外づれた虫屋の荷の中にあつて螢ばかりが、押しだ
まつてゐやうとは想へない。作者の夢のやうな詩境が想像
される句。

運轉手ごなつただけで無事にすみ

青 藏

俄然、ハンドルが躍動した。「莫迦ッ」と呼ぶ運轉手の罵聲。車内の人々はなだれを打つてぶつ倒れた。間髪を入れず死線を越えたのが一人の老婆だつた。怒つて見ても仕方がない。まあ無事でよかつたといふ顔と顔、眼と眼が語り合つてゐるばかりである。

文化村も良いが海拔千五百

房 子

赤い屋根、青い屋根。緑の丘に白い雲。土地會社の杭がニユーツと突ツ立つてゐるところもい、が——豆腐屋へ一里ではネ、その不便さも思はされる。

玩具みな春の夕べの影を吸ひ

山 雨 樓

なごやかな心境を、美しい情景の中に見ることが出来る匂ひの高い句である。

疊替へ座つて見たり寝てみたり

一 八 郎

イヤにあちやちやけた古疊が、藪の匂ひのぶんくする青疊と取換えられた時のよろこびは、自分の家でありながら自分の家でないやうな、そわ／＼した氣持に襲はれ、ホン

の一寸ではあるが落ちつきを失ふものである。

皿の繪の藍蒲鉾に染まりさう

琴 の 舍

印象的な描寫で、白い蒲鉾が眼に見えるやうである。

二階借前の不埒を聞かされる

米 一 朗

よく戸締りを忘れるし、火じまひがルーズだし、ソレに誰れだか判らない人を連れ込んで夜遅くまで呑んだり騒いだりしてホントにだらしない人でした。おしまひには毎日のやうに借金取りがくるし、新聞代まで立換えさせられるので……とおとなしく聞いてゐれば果てしがない。

身の上話へ白粉はげてくる

お さ む

夫の極道ぶりを一トくさり、それから姑にいぢめられるいぢめられぶりを小一時間。

歌人 M H の 生活

安閑と三十一文字の阿片性

天 痴 人

昔も今も、歌人には一脈通するノンビリさがある。阿片性と擲捨するところにこの句のいのちがある。



樽柳作近

選郎路生麻



踏切を大手振らせて男親

大阪 柳大門

善人は返辭を妻の眼で判じ

同

糟汁をよばれに下りる二階借

同

氣違ひが私の云ひたいことを云ふ

同

嚏をまともにくけた梅の花

同

酒の菜妙を得てゐて嫁かず後家

奈良

辻本草之助

三味線もせうことなしの鳩ほつほ

同

襟卷の狐の顔に憐れあり

同

ソースかけてから競馬で損をした話

同

汚れたる硝子のままに年が明け

同

わが事と女將きめこむ續き物

豊中 阿部 閑生

黒髪が雪をのせ来る夜の温泉宿

同

ともかくも不在狙つて禮廻り

同

うららかな庭で長者は釘を申し

大阪

石田 沐天



上女中主人を叱るやうに着せ	同	餅だけは搗いてやりたい子澤山	同
山莊に孫にも似たるモガと住み	同	切り札にたちくくと押されたり	姫路 潮田 明坊
鳩の巢のやうにアバウト窓に顔	同	あの餓鬼ですかと顎がしやくられる	同
來年は知らず桑の葉ちるばかり	長野縣 金井有爲郎	刺のあるあの目の目が威壓する	同
握手すれば固し滿洲移民團	同	帽子掛へ三圓位のが課長	今治 渡邊 芳岸
百圓の犬が汚い舌を出し	同	友情を強要されて借りられる	同
ポーナスの殘骸となる状態	同	嘘を言ふ氣へ廊下が續く	同
ありついた仕事は雨のピラ配り	大阪 畑田よしえ	洗濯をするにも女給腕時計	兵庫縣 戸倉 普天
子澤山女房に年をきいて呉れ	同	沈む陽を宿の二階でヂツと見る	同
冬の山しばかり人に會つただけ	同	どこに行く船か濛々西さして	同
誘惑のあんな男に名文句	同	スカート <small>愛媛縣</small> の短き少女寒に入る	町田 承春
文學にかぶれた頭艶がなし	今治 長野 文庫	風に鳴るやへコトタン屋根	同
速記録中程からは聲を立て	同	片耳にマスク掛けたるまま話し	同
親を繼ぐつもり算盤専修科	同	四十の自信に髭の委よし	兵庫縣 田邊 由布
孝行の目立つ貧乏とは哀れ	同	話ふと誠にふれたる夜の塞さ	同
母親は半襟だけの歳の市	兵庫縣 林朔風	父のない子にピフテキの匂ふ晝	同
奥さんと呼ばれて襟をかき合せ	同	返答無用腕力で解決し	朝鮮 弘津骨人坊



- | | | | | |
|------------------|-----|-------------------|-----|-------|
| 力癩頼もしいとはフラツバ | 同 | 遊びたいシャツが乾かぬ獨り者 | 名古屋 | 稻垣 正穂 |
| 縫上げた晴衣うれしく手を通し | 同 | 松過ぎの財布に紙幣が見當らず | 同 | 同 |
| 事故おこしさうに濃霧へ鳴る汽笛 | 大阪 | 思ひ出が吸取紙に在る若さ | 長野縣 | 林 幹 |
| 別荘の裏門一つ燈が暗い | 同 | 親切が過ぎて不安な母と娘と | 同 | 同 |
| 積荷見ながら牛が待つてる | 同 | 積上げた丸太へ子供身が輕し | 名古屋 | 星野 兄兒 |
| 寧ろ夢多きを歎す四十一 | 東京 | 癒るよと母に云はれる身の不運 | 同 | 同 |
| 人の非を發いて淋し佛の日 | 同 | お煮々に日本日本の味がする | 大阪府 | 米本貴志子 |
| 此の色にならうと思ひ林橋むく | 石川縣 | 初風呂でよい聲の下女見附けたり | 同 | 同 |
| 慕二つ比翼連理の冷たさよ | 同 | 佛壇の父へ揃ふたお正月 | 大阪 | 岩橋 岩石 |
| 美しい齒並を見せて糸を切り | 廣島縣 | 湯のたぎる朝起されて居るも良し | 同 | 同 |
| 輸血する醫者の手元を皆覗き | 同 | 初詣誰かゞ砂に躓づき | 奈良縣 | 嶋田 翠峰 |
| 棟上げの濟むか濟まぬに塞いで居 | 大阪 | 正月はこも手輕な茶碗むし | 同 | 同 |
| 見てくれる人を笑ひへ誘ふ豚 | 同 | 日記帖ぼち／＼だれてもう二月 | 大阪 | 金井 串郎 |
| 考へて置けと淋しい氣持で寝 | 朝鮮 | もうすこし讀みたいとこを掃き出され | 同 | 同 |
| ともかくも終りまで聞く齡になり | 同 | 大切な物のうちなり下足札 | 松山 | 芝田 靈子 |
| 外交の名刺一瞥されただけ | 大阪府 | 年賀狀二つに分けたゴムバンド | 同 | 同 |
| バットもみ消し師走の火鉢立ち上り | 同 | 獨立の明日へ嬉しい吸取紙 | 丸龜 | 馬場 浪二 |



- | | | | | | | |
|------------------|---|-----|-------|-----------------|-----|-------|
| 結ばせるネクタイ色も新世帯 | 同 | 大阪 | 關本 雅幽 | 終點は車掌起して呉れるとこ | 大阪 | 坂 澄 風 |
| 何か食ふ賑やかな病室もあり | 同 | 大阪 | 關本 雅幽 | お蠟燭お布施の時間だけともし | 同 | 同 |
| かりものの何處へ還すも天地の | 同 | 同 | 同 | 厚司着て飲むコーヒなり五錢なり | 大阪 | 庄司淡路坊 |
| まだ死なぬつもり五ヶ年日誌買ひ | 同 | 豊中 | 金田 並木 | 新開地目標になる家があり | 同 | 同 |
| 氣の弱さ神占ひをもうけさせ | 同 | 同 | 同 | 意見だけ聞いて結局借りて来る | 島根縣 | 山本 勇坊 |
| 値切られて賣るも師走の夜の事 | 同 | 名古屋 | 西村 上上 | 俺が俺の口養つて年の暮 | 同 | 同 |
| 一錢も馬鹿にはならぬ子を持ちて | 同 | 同 | 同 | 釣堀の向ふから目で話し込み | 大阪府 | 黒川 紫香 |
| 戸締りをして八釜しい秋の虫 | 同 | 山口縣 | 西口悲戀坊 | 校庭の始業見て行く高架線 | 同 | 同 |
| 諦がつかず朝々花を變へ | 同 | 同 | 同 | 土堤の草轍の水を吸ひつくし | 大阪 | 地黄 天國 |
| 暮れきつてバスにまつはる湯のけり | 同 | 大阪 | 正本 水客 | 青空へ笑ふ女が硝子拭く | 同 | 同 |
| 舟とめて筏の人と話したり | 同 | 同 | 同 | 末ツ子の一人歸つた賑やかさ | 愛媛縣 | 鷺野 榮 |
| サンデーを寝て髮結の世辭をきく | 同 | 尼崎 | 山田南渡路 | くどかれる恐れのチップ押返し | 同 | 同 |
| 門松は皆釘付の長屋に居 | 同 | 同 | 同 | 横顔に視線感じて居る女 | 大阪 | 米林 舞蝶 |
| 落籍す氣の男がかくす戸籍面 | 同 | 神戸 | 坂上 啓坊 | 二十一さあこれからだ忠と孝 | 同 | 同 |
| 一念はこはいもんやと襟を塗り | 同 | 同 | 同 | 飲む程に酔ふ程に首相も何のその | 大阪 | 大 西洋 |
| 正月はどないしてたと初勤め | 同 | 島根縣 | 原 獨 仙 | 妹が美人で姉は姥櫻 | 同 | 同 |
| サーヴィスと知らず無性に嬉しがり | 同 | 同 | 同 | 二次會は危うおますと抱へられ | 伯爵 | 林 小 判 |



- | | | | |
|------------------|-----------|-----------------|-----------|
| 信用がすぎて丁稚は使ひ込み | 同 | 弟の方が大きな足袋をはき | 廣島縣 町田 垂柳 |
| 手洗の水の切れたる驛寒し | 今治 青野悦太樓 | 試験場鼻すゝる音ペンの音 | 高松 楊柳 夢 |
| 時間来て歸らぬ父を持つてゐる | 同 | 新聞に春の重さがついてくる | 金澤 島田 涙笑 |
| 無心からぶつ切り切りたい戀もあり | 兵庫縣 夙川 與郎 | 風は北に背戸の豚小舎朽ちかけて | 鳥根縣 寺本 嵐峰 |
| 叱られて父の綽名を云ふて泣き | 大阪 上山よしみ | 間違ひの電話に起きた午前二時 | 大阪 馬淵 龍城 |
| 合の手が思ひ出せない松の内 | 愛媛縣 門田 雨城 | 正月の構へ飲み連から數へ | 長野縣 高峰 柳兒 |
| 没落をする階級へ今朝の税 | 尼崎 酒井 斗風 | 制服の處女にサインは取り巻かれ | 大阪 小西 落丁 |
| 電車からバスへ疲れた身を運ぶ | 大阪 原田 輝親 | 初孫へ姓名學の本を買ひ | 東京 阿部佐保蘭 |
| 日記帖だけが残つて人生か | 神戸 藤井 徒歩 | 門松のトップを切つた高島屋 | 大阪 西畑 南天 |
| 絢爛の舞臺白粉かはかぬ日 | 大阪 上田大溪水 | 外交員妻の病氣も種にする | 今治 曾我部尼花 |
| 横町で荷籠下して錢をよむ | 尼崎 坂井 胤盈 | 平凡に育てるのさへ骨が折れ | 朝鮮 豊島 松女 |
| 地藏様お顔に糞がついてます | 廣島 野田 昇玉 | 干竿で俺のスボンが歩いてる | 今治 石田美須賀 |
| 勤め人に向かぬ氣性とさとりかけ | 大阪 小鹽 靜路 | 書初の墨のかすれをほめて酔ひ | 大阪 阿萬 萬的 |
| 眼が似てる鼻が似ると子をあやし | 鳥根縣 森山さわだ | 電車汽車はちきれそうになる紋日 | 大阪府 大島 錦溪 |
| 船乗も若い内なり繩梯子 | 大阪 中村 靜城 | 酔へば尙父は話せる話する | 名古屋 熊澤 朗央 |
| 母親の身方のやうに娘が育ち | 長野 中村 猪郎 | 言分があつて弟の涙見る | 兵庫縣 酒井美知夫 |
| 金盥二つで女風呂へ行く | 大阪 北川 春巢 | 尋ね來し友着ぶくれてゐる寒さ | 愛媛縣 町田 満女 |



ガラス拭く欠伸もかけて拭いてゐる 今治 石手向上庵

朝夕を邦金主義の無表情 大阪 山田 菊人

成功を淋しく涙ぐむ女 鳥取縣 勝部 海棠

せがまれて編物茶棚へ立上り 大阪 中井 シナ

彈初へ母の地唄の古めかし 大阪 今井 菊路

ポーナスは他人があてにしてくれる 廣島縣 松井 可笑

雨宿り書生の曳いたボチ平氣 今治 石手 河鹿

しつけ取る着物に母は子を見上げ 大阪 秋山 古心

長生きをする相にして總入齒 明石 大龜空太郎

ストープの無い驛で待つ旅役者 今治 菊池 香方

働いて貰て正月待ちきれず 大阪野 宮岡 公子

ステツキの先で示した紳士振 朝鮮 豊島石燈籠

有りさうな人が素通る慈善鍋 大阪 井 上

國家論所詮認識不足なり 兵庫縣 田島 破鼓

物好きの説をスキーへ祖母曲げず 大阪 山川 一生

除夜の鐘ラヂオはリレー式に繼ぎ 神戸 難波陽出男

話しかけても返事せぬ妻泣いてゐた 廣島縣 黒本 芳泉

友情を強要されて借りられる 今治 渡邊 曉童

妻と話す煙管持つ手もいたにつく 大阪 泰 曉夢

出勤の電車は今日も同じ顔 大阪 中村 月進

系統を見分けて乗つて街に馴れ 神戸 山田 丸樂

移民船日本を狭く見る姿 石川縣 松本 文太

今度こそなどと一足づゝおくれ 朝鮮 高原懸源太

セルロイド玩具へ火鉢のけられる 今治 石崎 柳石

枯草にポイトは赤い腹ならべ 大阪 高野 拜火

昇給へそろ／＼子供欲しくなり 難波南海男

しばらく鳴りを鎮めてゐた さを見させてゐる。心境に變化

大門君が近ごろグ／＼作句 を生じたのか、今までに内に

しはじめ本號ではトップを切 押へて来たものが進出したの

つてゐる。「三味線も」など か、何れかであらう。草之助

に至つては輕妙そのものであ 君はダークホースだ。近來出

る。
閑生君の「ともかくも」や 爲郎の諸君がある。今後の活
「氣遣ひが」の如きは、いつ 躍を祈る。(路)
もの句から見ればウンと銳び



東京と大阪

福田山雨樓

川柳人と髷

髷を生やした川柳家は割合に髷い。
しかし大阪にゐた頃は路郎主幹を初め
艸樂、雅幽、青兒、翠夢、没食子、喜
由、九天氏等髷の持主に平素よくお目
にかゝつてゐたし、それから溪花坊、
夢路、雲雀、幽香氏等美しい髷を貯へ
られた諸先輩の知遇を得てゐたので、
髷の川柳家は髷いと云ふ感じをあまり
抱かなかつた。ところが東京へ来て見
ると髷が大變に髷い。殊に僕の勤めて
ゐる役所あたりでは二千人以上から居
るのに、髷の人はまるで迷ひ兒を探す
ような有様だ。貧弱な髷に未練のある
僕は、轉動早々からこの現實を痛く感

じてゐたところ、隣の部室のS氏は御
用始めに顔を合して見ると、奇麗に髷
を剃り落して御座る。こんな風で髷は
減る一方だ。川柳家でも周魚、鬼佛兩
氏を除けば髷は減多に目付からない。
幸ひ五花村氏が東京に住はれるやうに
なり、髷の一勢力を加へたが胡麻鹽髷
の久良伎翁は元より、角戀坊翁も餘り
句會などに出席されないので寂しい。
大阪で髷を残された正光氏が、昨年
夏突然東京へ轉住され句會毎に顔を出
されるので、僕は大幅な力を得た心持
がする。僕は斷然東京の風習に攻して
髷を落さぬことに決めた。そこへ昨秋
町二氏が上京したので久し振りに逢ふ
と、彼氏仲々可愛い髷をもつてゐる。

商工業の都大阪にあらゆる職業人を
通じて比較的髷が多いのに對して、政
治の首都東京に實業家は勿論、官吏迄
が髷を粗末にするとは一體何事である
か。
序ながら陸軍將校には髷が多く、海
軍將校には髷いさうであるが、その原
因が奈邊に存するかは軍部も明言して
ゐないやうである。

句會と賞品

東京の句會ではいまだに賞品を出し
てゐるが、大阪の句會では特殊の場合
の外は賞品を出さない。(これは京都
神戸も同様のやうである)この賞を賭
けないことを大阪方は常に誇つてゐる

し、東京のやり方は川柳を冒瀆するものであるかの如く批難してゐる。又東京方でも出来れば賞品は止めたいのだが、と暗に賞品制度を肩狭く思つてゐる向もある。物を睹けるのだと云ふ見方だけからすれば、このやり方が不純であり、非進歩的であり、一種の興行化であるとも云へやう。しかし見方はいくらかもある。例へば若し將來ジャ

ーナリズムが川柳の藝術價値に着目して、句會のよりよき作品に對して原稿料を拂ふと云ふやうな時機が來たらどうであらう。素晴らしい創作、奇才天才が次から次へと生れるかも知れない。或ひは又現在賞品代に使用してゐる金額を、選者への謝禮に代へ以つて一層責任あり權威ある選評——それは必ずしも句會で披講されずともよく、誌上で翌月發表されてもよい——が得らるゝやうに賞品制度の變革を試みることも出来やう。尤もこれは賞品を出すやり方とは趣が違ふけれども、句會

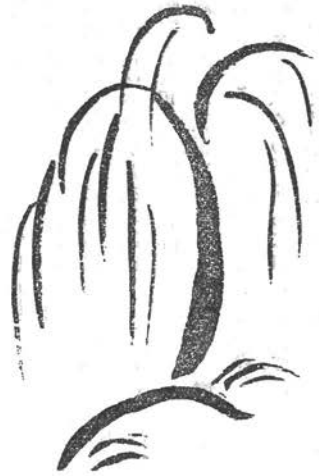
々費の中から賞品代を生み出す現在東京の句會機構は、さう云つた變革を孕んでゐるとも見られるのである。それから賞品を出すことに依つて、出席率を高め作句能率を増すと云ふ、作家と主催者双方の利得が現實に生れて來ることも見逃すわけにはゆかない。

川柳人とインテリ

東京の川柳家にはインテリが尠く、大阪の川柳家にはそれが多い。と云ふやうな感じが僕にはするのである。しかしこれは必ずしも事實ではない。寧ろ皮相の觀ですらある。皮相の觀であるにも拘はずどうもさう云ふ感じが去らない。早い話が東京の太郎丸氏である、同氏は慶應の文科出身であるとい聞いたが、どこにもそんな素振りが無い。前垂を懸けても似合ふやうな、純簡な商人容姿である。少しもインテリ臭がない。盈光氏などに會つたら商人そのものである。雀郎、啞三味、空壺氏等の新聞人にしてもそんなにインテリらしくない。其の他多くの先輩、中

堅、新進作家の容姿、言動、筆致が不思議なほど市民性を帯びており、インテリ振らない。僕は東京へ來る迄は句會などに行つたら恐らく洋服が大部分であらう、英語や新しい言葉を使はれてまごつかされるであらう、と内心自らインテリ宗を奉じて上京したのであるが、來て見ると案の相違で、句會など洋服は數へるほどしかない、みんなの顔もそんなに鋭くないし、言葉も軟かい。それでゐる内に深くインテリの素地を藏してゐると云つた風である。大阪の川柳家には勿論インテリの方々もゐられるのであるが、誰もがインテリらしく見受けられる。これは當の本人たる僕がインテリらしく粧つてゐたので、他の川柳家までがそんな風に見えたのかも知れないが、兎に角さう云つた雰圍氣が句會などにも流れてゐたやうに思ふ。

これを逆に解いて見ると、東京の川柳家にはもつとインテリの素地を發揮して頂きたいし、大阪の川柳家にはもつと野人振りを丸出しにして貰ひたいと思ふことだ。



武玉川三編研究 (二)

梅 本 秋 の 屋
森 東 魚
蛭 子 省 二

(13) 鳶を見て居る桶伏の穴

秋の屋 桶伏にされて、窮屈な思ひをしてゐる男が、青天に翼を伸ばして、悠々と飛揺する鳶を、桶の節穴からみて羨む、といふのである。

東 魚 桶伏は掘風呂桶を以てするから、其焚口の穴から、空を見上げるのであらう。(前説節穴とあるは、書き違ひであらうか)。

省 二 「學錢を負たる者をとらへて、入湯桶を打かふせ、銀を受合する事なり、昔はたまさかに斯ることも有もやしけん、今は名目のみ有て、かやうの仕業はなし」で、『桶伏もなき今の吉原(眉初)——「桶伏は淋しくなると首を出し」。

(14) 寺の名の立夜の大名

秋の屋 大名が旅行する時に、何かの都合に由つて、ある寺院を旅宿とされた。それで今迄は餘り世間に知られなかつた寺の名が、人の耳に入るやうになつた。

東 魚 大名の旅行の時、さういふ事があり得やうか。寧ろ酒宴中などに、自領地内の寺が噂に上つた時、大名の我儘根性で、即刻行つて見やう、などの場合から、忽ち有名になつたのではないか。

省 二 御尤なお意見ではあるが、私はこの句をみた時から、秋翁説の如く解してゐたもので、類句があつたから探してみたが、今一寸見當らぬのは残念。

秋の屋 領地内を巡檢する時などに、寺院を臨時旅宿と

する事は有らうと思ふ。

- (15) **みんな** 寝た夢の上行面白さ

省二 二 小さな寝静つた頃を見計つて行くのは北國。古川柳には呉服店の番頭氏など、この面白さを味つたものとしてある。「四ッ過ぎの四ツ手くれはの里の人」

秋の屋 二 私北國行でなくて、下婢の部屋へかと思ふ。

東魚 二 「面白さ」と云ふ心持ちが、どうも下婢位ではなさうに思ふ。北國の方らしい。

- (16) **新地の障子菜**の上で張る

省二 二 新地気分は出て居る。「金砂子」に「新地の烟菜の上を行」があるが、障子を張る方が情景として優る。

秋の屋 二 今日の文化住宅といふものにも、斯る情景は尠くあるまい。

東魚 二 菜の上とは、菜の花畑を見渡す心持ちであらう

- (17) **柱こよみ** 寝て見る程に春近き

省二 二 「大小つツくるみ一年が四文」の一枚刷の略曆もふぢき春だなアと、寝轉んだ儘に師走のところを見て居る。「はしら曆を抱けてよむ」(武・九)よりは良い。

秋の尾 二 柱曆の十二月の所は、最下部にあるので、それを寝ながらに看ると云ふのである。

東魚 二 味はひが乏しい句だと思ふ。

- (18) **胴につかれて** 歸る舟宿

秋の屋 二 「胴」は借字で、博奕の用具の筒である。句意は舟博打をして、身體が疲勞した故、舟宿に引還して、休息することであらう。

東魚 二 花又鶯神社行きの、舟博突が連想される。

省二 二 「船賃をましてやるはと坪をふせ」。船賭博は流したものだ。古川柳には皆「胴」の字が用ゐられ、「いも頭おとして胴に叱られる」。

- (19) **古河の番所の管簾**なる

秋の屋 二 古河は、下總國葛飾郡にある小都會の名で、その西方に渡良瀬川が有り、此の川の下流が坂東太郎で、古河は武總の國境であつて、船番所が有つたのである。

東魚 二 河に近き故に、葭などが多いから、管簾を持つて来たのか。管簾は篋竹などの短いものを、連結したものであるか。管簾がハツキリ味が呑み込めない。

省二 二 細い竹を短く切つて、その穴へ糸を通した堅すだれである。以て、番所風景に應しい。

- (20) **雪陰を借りた** 所てほとゝきす

秋の屋 二 雪陰に杜鵑は、俳句にも川柳にも、多く詠みふるされて、陳風至極ではあるが、たゞ借雪陰だけが新しい東魚 二 畫、ほとゝきすであらう。どうも山の寺などら

しい。

省二 山寺の雪隠で聴くのなれば、申分なし。寧ろ贅かもしねぬ。——雪隠から山々を見るとか、帆掛船を見るとか、借雪隠の妙趣だ。長屋住ひではネ。

(21) 帆かけ船何もない日の取さかな

秋の屋 海邊か川邊の家で客を迎へて、酒宴を開いたが生憎に肴がない。その代りに帆掛船の通る風景をみながら盃を重ねて下さい、と云ふのであると思ふ。

東 魚 〓 お説につきる。「松へ帆のかゝるも宿の景色なり」(拙作)。

省二 〓 「取肴」とあるので、深く色々考へさせられてしまつた。「何もない日の馳走なり」と云ふところ。取肴は箸で採つてわけける意から出で、酒の肴に附けるものなのである。

(22) 夜は鼠のかゝる天秤

省二 〓 いたづらものだ。天秤にかゝつて眼を丸くして居る事であらう。

秋の屋 〓 金銀を量る天秤で、それに鼠が掛つて、夜中に音を立るのだ。

東 魚 〓 ユーモラスな句である。鼠は大黒天に縁があるから、金銀にもまんざら縁がないでもない。

(23) 惚くすり吝いなからも都にて

秋の屋 〓 都の人は吝嗇であつて、何事にも錢を出し惜むけれども、戀の道ばかりは特別で、若干の錢を出して、惚薬を買ひ求める、と云ふのである。

東 魚 〓 吝いと云ひ條、流石に都だけに、買人があるとみえて、賣つてゐる店があると云ふ意であらう。

省二 〓 吝いとか吝くないとか云つたところで、惚薬などを必要とするは、都人のみだ。従て供給する黒焼屋も軒を列べる。「惚薬春のものとも思はれて」(金・上) 有閑的遊戯であらう。

(24) 京の異見の届くはつ春

秋の屋 〓 京都より江戸へ出店した、呉服店などの店員に對して、故郷より異見の手紙が、年賀狀と共に届いたのである。

東 魚 〓 暮れに赤紙附の、金の工面でも頼んだのであらう。追掛けの意見の手紙が、初春早々届くと云ふ寸法である。

省二 〓 京の人は、こまかいとされてあるから、初春であらうが、おかまいなしに、意見の手紙も差出す。

(25) 賣つはな水ま二日の假枕

省二 〓 茅花は、子供の遊び物となつたり、又白花はた

べられもする。街へは小兒が賣りに出たものだ。二日間水に入れて保存したのである。「むさい盆つばなせとく王子道」などの句もある。

秋の屋 技巧に過ぎて、興味の無い句である。

東 魚 〓「賣るつばな」か「賣りつばな」か。私は前者であらうと思ふ。技巧的ではあるが、イヤ味と云ふ程でもないやうである。

(26) 新造の二人前付く奉賀帳

省 二 〓二人前書き附けるとは、氣前よし。尤も廓の女などは、神社や寺院の寄附には、氣前のよいものではあるそれに御隠居の懐をあてにもしてある。

秋の屋 昔は社寺の堂塔建立などの奉加帳を、青樓に持來つて、寄附を乞ふ者が、日々にあつたといふ。

東 魚 〓新造の錢勘定などに、無頓着なさまが、よく現はされてゐる。一人前は母親の分なとと考へもするのであらう。無邪氣な中のしほらしさもうかゞへる。

(24) 間合を見て 笑ふ連彈

秋の屋 藝者二人の連弾かなどで、その間に相顧りみて微笑する。といふので實際にも往々ある。

東 魚 〓軽い句である。表現も無駄がなく難がない。

省 二 〓連彈の二人も、愉快さうだ。「連彈の唄の間に笑ひ合」(武・十六)

(28) 雲の峰碇の網に湯氣か立

秋の屋 炎天に雲の峰が立つ程の暑熱に、潮に濡れた碇網が乾いて、其處より湯氣が立つ、といふのである。

東 魚 〓碇網に陽炎がすると云ふやうな句は、見うけたやうに思ふ。暑さの盛の時だから、「湯氣が立つ」とやつたのであらうが、少し含蓄に乏しいやうに思ふ。

省 二 〓雲の峰が出て、イラ／＼と照つて居る様は現はれてゐやう。

(29) 尻もちはきのふと見へる大根引

省 二 〓尻のところが汚れて、乾いて居る「大根引後へ餘る力かな」(蒼狐)。古川柳には大根引の句は乏しい。

——「右へ御されと大根曳せく」(武・十一)。「足跡の丁度揃て大根引」(武・五)。

秋の屋 大根で道を教へるといふ句があつたと思ふ。

東 魚 〓「引き扱いた大根で道を教へられ」である。

(30) 手代を付て初の勘當

省 二 〓親の慈悲だ。手代附とは寧ろ贅澤。「勘當も初手は手代におくられる」

秋の屋 銚子の帥に左遷されて、暫時窮命するのである

東 魚「つけ登せ」で手代を附けて、京へ追返され、
一時何處かへ預られでもするのではないか。銚子へは手代
附では如何であらうか。

省 二「つけ登せの句を一つ。『神奈河で見る付け登せ
者』(武・十一)

前 號 (武玉川) 正 誤 表 (姪 子)

(貞)	(段)	(行)	(誤)	(正)
一六 下	一	まさる	まらざる	
一七 上	八	一木にて	一木にて	
一七 上	十	杵形	杵形	
一七 上	十三	用ひたは	用ひたのは	
一七 上	十五	沓袋	浮袋	
一七 上	十六	事もなりはせぬか	事はなささうで	
一八 下	五	智恩院	知恩院	
一八 下	九	智恩院	知恩院	
一九 上	三	樂しみ	樂シミ	

川柳を談しに お越し下さい

市バス玉出停留場直ぐ西入
喫茶室
キング喫茶室

と かん と

道頓堀へお越しの
節は是非お顔を
お見せ下さい

南地法善寺

南 湖 月
店



「武玉川三篇研究」を讀む (一)

穎原退藏

(2) 浮沓を馬鹿にして居る都鳥

浮沓は武術の一具で、西鶴の男色大鑑に「挾箱にたみ船を仕込み取組めば三人乗りて大河を越すにためしあり、自然の時は用にも立ちぬべし。その外浮沓樺火矢を申立に御合力分百石下しおかる」等とある通り、それ〴〵秘傳があつたものらしい。すでに省二氏の詳説も見えて居るが、この武玉川の句意から考へると、やはり名の如く沓状をしたものがあつたのではあるまいか

それで東魚氏説の如く、形状の類似から都鳥が馬鹿にするといふ適切さが味ははれるのである。もし浮沓が単に身につけて浮くだけの袋なら、強ひて都鳥をもつて來なくても、鶴でも鳩でも宜いわけである。蕪村の句「鴛や國師の沓も錦革」もその色彩形の類似に興味を持つたのである。

(8) 女の智慧の青い庚申 東魚氏説に

贊。猿蓑の連句「旅の馳走に有明しおく芭蕉、すさまじき女の智慧もはがなくて、去來」の附合が何となく聯想される。

(4) 鼓打女の時は乳へ付 「鼓打つさ」

讀み方の法意がしてほしい。でないに現代人は「つみうち」を名詞によんでしまふ

(6) さられた足で早乙女に出る これ

も蕪村の句「離別れたる身を踏込て田植哉」がすぐ聯想される。東魚氏説の如く哀れさを味はふべき句である。たゞし句意は夫さは飽かぬ仲間から、姑さの折合が悪い

か何かで餘儀なく去られた妻が、すぐその足で先夫の家の田植に出るといふのだと思ふ。田舎では田植の時は一村互に助け合ふ

のは常の事で、自然かうした場合もないとは限らない。少くとも蕪村の句意はさ解してあはれが深い。なほ武玉川などの句が、

前句が判つて居るさ解し易い事は勿論だが、さりさて前句が判らなければ興味がない

は考へられぬ。一句立てに興味があれば、この種の高點附句集が生じたのである。随つて前句の如何については多く顧慮する必要がないと思ふ。現にこの武玉川の附句も蕪村の發句を、解釋上殆ど異なる點はないと言つて宜いので、武玉川の句はそのまゝ獨立して十分に解されればならない。些か言過ぎたかもしれないが、これはさにかく江戸座の高點附句集に對する解釋上、重要な事だと思ふからあへて一言した。

(10) 役の行者の行當る市 大和地方

は古くから市が發達して諸方に榮えた市があつた。上市・下市の外海柘榴市丹波市等が有り、市の辻橋の木陰等に人を待つ萬葉集の歌は人のよく知る通りである。武玉川の句意も自ら明かである。市もイチと讀むべきであらう。

(12) よしの山をかちる小座頭

吉野の山は糸竹初心集等に見える小唄「吉野の山を雪かと思れば、雪ではあらで、やあこれの、花の吹雪よの、やあこれの」をさすので、三味線唄の初歩のものである。浮世草子などには枚擧に違がないくらい散見する。句意は言ふまでもなく、小座頭の三味線の習ひはじめである。(一月二日夜)

★オリ
ンピック貯金の提唱

文藝オリ
ンピック問題が云々されてゐるが、文藝オリ
ンピックは有耶無耶に終るかも知れない。例へ之れ
が實現を見ても、短詩としての川柳が、その競技に加
へられることはおそらくあるまい。それを問題にする
文藝家もゐないだらうし、それに参劃する運動を起す
川柳家もゐないだらうと思ふ。川柳人協會が十年早く
設立されてゐれば、かうした運動も不可能ではあるま
いが、四年先の一九四〇年では、とてもそこまでは手
が届くまい。と云つて袖手傍觀も智慧がなさすぎる。
川柳人は川柳人としてのデモストレーションを東京で
舉行し、我が短詩壇のために大いに氣を吐きたい。
そこで全國川柳人は、オリ
ンピックを目指して見物
と川柳人交驛のために出京する準備を今から開始して

欲しい。その方法としては先づ「オリ
ンピック貯金」
を實行することが先決問題であらう。具體的な案を決
定して貯金参加者を募集するのも一方法には違ひない
が、各自に或は各吟社で貯金するのもし。何れにし
ても、全國川柳人が出来るだけ多く、この機を利用し
て東京に集合さへすれば、新しい境地は自ら拓けて
來ると思ふ。切にオリ
ンピック貯金の實行を望む。

★柳人に告ぐ

川・協の仕事として、來年度あたりから年刊句集の
刊行を創始したいと思ふので、今のうちにドシ／＼會
員に加盟して頂きたい。

句集編纂の委員は全國役員並に正會員の中から適當
な方に依頼して地方色を失はないやうに、眞に日本の
年刊句集にしたいと思つてゐる。心ある人々の支援
を乞ふ。

柳川さ氏ンペンル

書武川小・郎路生麻

今宮保護所の主任の話では俳句を作れ
さ云つても風流では腹がふくれぬ云つ
て、うごんども奢らぬさ俳句を作つてく
れぬさのこと。

なるほど尤もな話だ。うごんども奢らず
に俳句を作れさいふのは
作れさ云ふ方が無理だ。
人間は先づ第一が食慾
だ。お次ぎが色慾だ。元
來知識慾や名譽慾は食慾
や色慾の前へ出たら顔色
の悪いものだ。

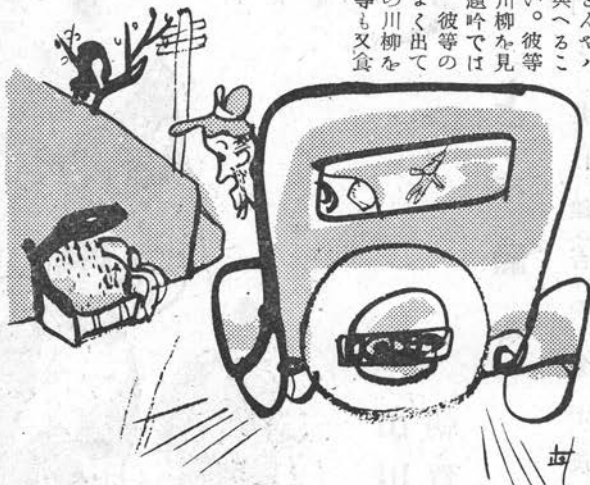
彼等が風流と稱するも
のには彼等の食慾からは遙
かに遠くて小さなものだ
私は彼等に風流を教へ
やうさは思はない。従つ
て彼等にうごんども奢つて
まで川柳を作つてくれさ
は云はぬ。川柳すること
は風流ではないから私と
しては彼等が自然に作り
たくなるやうに仕向ける
ばかりだ。そして川柳す
ることによつて生甲斐を感じさせれば私
の目的は達するのである。川柳は人間陶
冶の詩だ。たまひルンペンの生活をして
るでも心の底には詩がある筈だ。それを
引張り出せば私の役目は済むのである。

食慾や色慾なら人間以外の動物がみな
所有してゐる筈だ。それだけで満足の出
来ないところに人間の尊さがあるのだ。
社會事業はよい人間をつくるのが仕事で
あつてうごんども
ンを投げ與へるこ
こではない。彼等
の作つた川柳を見
ると、課題吟では
あつたが、彼等の
純情さがよく出て
ゐた。次の川柳を
見れば彼等も又食
慾や色慾
の塊でな
いことが
知れやう

タクシ
ーに乗つ
ても道の
ゴミを見
る

この句
には職業
意識が
出てる。

これは花七〇號東留夫君の作である。
タクシ―に乗つた昔に早よ成る



この句は作者が不明だが人生にまだく
希望を捨てゝゐない。
これさよく似た心境を詠んだ句では
一日も早くタクシ―で走りた
といふのがあつた。

タクシ―に一度乗り
たい心地する
さいふ本音を吐いた
句もあつた。

タクシ―で日本巡り
の夢を見た
さいふ詩人もゐる。
随分澤山作句された
が客觀的な句はありき
たりの句が多かつた。

彼等が常に作句して
ゐないので、無理もな
いと思つた。寧ろ形が
出来てゐるのが不思議
な位だ。
刀根山病院の患者の
句が悲痛な叫びである
やうに、今宮保護所の
被壓迫階級の人たちの
句も痛烈な人間苦の詩

であらうさと思うが、
それはある程度表
現練習をつんだ雑吟に求めなければなら
ない。



町・横・柳・川

周魚の大朝の講堂で、川協も川柳職業人も東京は全く出し抜かれた形だと路郎をウンと擡ぐところ、流石に東京代表。

★

水府は福助やグリコで磨いた腕で番傘二十五周年記念事業を素晴らしい賑やかにやつてのけた。艱難汝を壁にすである。

★

番傘主催の座談会で一番嬉れしかったのは亡き柳友卯木を語る百樹老の情熱を知つたことである。

★

路郎の悪戦苦闘ぶりを氣遣つた東魚「オイ、摺り切れるナ、摺り切れるナヨ、摺り切れちゃ、駄目だぞ」泣かんばかりに手を握る。

本願寺へ小ざさく信者立ち

佐保 蘭



(七) 本願寺

山川紫明選
朝賀大鱗畫

一門と共に銀杏の葉が茂る
南無阿彌陀塵も積つた本願寺
本願寺吾も善男の數の中
はるくと骨持つて來る本願寺
世間音
讚華
紫香
美知夫

★ 川柳職業人の意義を解さない柳人の多いのに驚く。川柳を解さない社會人を笑へない。

★ 珍竹林が雅號を氣にしてゐる。それで雅號のこゝを少しく書く。

きん坊は錦浪で死んだ。鯛坊は周魚になつたが、飴ン坊は京魚になりきれずに飴ン坊で死んだ。雅號は符牒であるから、何んでもいゝといふ理論はなりたない。改號は早い方がいい。

★ 史風は三越の南の端のショウウ井ンドーの中で生れたといふ。鼠ではあるまいし眞逆そんなこともあるまいと、よく／＼聞いて見ると彼が生れた時分には、そこが彼の家の奥の間だつたそうなる。

★ 番傘二十五周年の大會に、道のためさば云ひながら、公會堂の入口で所持品の受付をしたり、エレヅエーターへの案内をしたりしてゐた紋付袴氏の勞を痛むたい。

人生五十涙ぐましき事多し (不死鳥)

京名所	一番先の	本願寺	石燈籠
團體の	旗で色採る	本願寺	水客
本願寺	瓦端折つて	續くなり	いの助
車窓がら	本山の屋根	教えられ	狸公三
觀光へ	俵夫もかざ	んだ本願寺	木履
杖置いて	腰を伸ばした	本願寺	武雄
色々な	訛本願寺	を見上げ	哲治
本願寺	堂の柱へ手	をつなぎ	勝
洋装が	はつきり目	立つ本願寺	文庫
本願寺	吾本山の	旗を立て	新水
極樂が	此中にある	勅使門	小貝
本願寺	疊の數を	讀み違え	有耕
本願寺	東山から	見直され	翠峰

日本名所

名物川柳

(京都の巻)

い絃の音が絶へ／＼に聞えてくる、注連縄を引きめぐらして黒びかりに光る、とてもでっかい大箒の前に一對のスキーが立てかけてある、誰れのかは知らず、この結構が全く飛彈あたりの大家族の山の家屋の裏所にでもゐるやうな心地がする、こゝで私は立つたまゝ舊式な盃でもつて屠蘇酒を一献、春は新町の吉田屋からと、いつたやうなわけ、懐ろに鳥目はなくとも、こんなにして到るところ目出度い松の内の大振舞にあづかり、考へやうによつては、この高等ルンメンの私の方が世間さまより餘つばど仕合せな、好い正月をしたさいつてもよろしいのである。

☆街に住めば

高橋かほる

お正月一ト月だけの約束で大阪毎日新聞を取つてみるさ夕刊に泉鏡花作の「薄紅梅」さ云ふ嬉しい題にしかも清方の畫やさかいにカッともふさのついた梅のかんざしなんてほんまにうれしい。

☆川柳花道

水谷 鮎 美

僕が歩いてゐるさかならずあそをつてくる者がある。来たなあとおもひなが

らあの手この掌を考へる暇もなくさつと斬りこんでくるのが定。月の出におもしろき風情だほゝえまきかなでもある南瓜の花ざかりを囁ふ人生。

殻をぬぐぐぐ心臓を鏝る——移りゆく世相に孤立する影を同行衆がたすけて下さる柳人の呼吸が健吟にびつたりさきてするどい奔流となりて手にされざる日月のながれの如くすきゆく。詩想臆老にはなりたぐない絶ゆまざる光りをあびる柳人こそいつせいに一歩を以て一句を残さねばやまぬまじゝるをもちつづけねばならない。(ある茶房にて)

☆十銭銀貨と僕

西 いわを

もう七八年にもならうが僕の褄口に明治二十八年の十銭銀貨が一枚ある。これは極く無口な男であつたが珍らしい事には特によく話す癖のある友人から貰つたのであつた。

其の時の約束に何時迄も持續ける事を誓つた。乗合バスの端金、散髪賃を拂ふ時等暫々使はれさうな折其の男との約束を守つて今迄持續てゐる。友人さげ遠く離れてゐるが毎日褄口を手にする時費はない様落さぬ様にさ約束を違えぬ様に心懸てゐる。

☆川柳の今治

長野 文庫

今治柳界の近況を極く簡単に書いて見たい。

昭和七年渡邊曉童氏が現在裏中に在る宮内耕頭氏(當時松山住)を通じて今治に川柳を植へつけて以来、月原宵明、武田紫陽、花間小樓、谷心府、原田一風、長野文庫等その下に集ひ集り、昭和九年に早くも川柳雜誌支部の設立を見、更に一方では同十年武田紫陽氏が川柳誌「みすか」を發行するに及び、古川柳研究家の石崎柳石氏まつ先に馳け参じて句に、文に、論に旺んに活躍して、その中心となり、又經濟學士矢野虻の慶氏加りて編輯を司り、面目を一新し、菊池憲一氏は一人四役の覆面をかむつて賑々しく登場それに伊豫鐵の柳人連も参加し、未だ一人の落伍者なく、茲に今治柳界は寔に賑かな黄金時代を現出した。多くの柳人の中には、理論家あり、實踐家あり、宣傳家あり、努力家あり、才人あり各々個性あれど、いづれも同じ柳の下に集ふ人々、和氣霽々の裡に趣味生活を満喫してゐる。併し吾等は此の程度に満足するのではなく、俳句松山に對して川柳今治と呼稱されるまでに川柳を徹底せしめ度い念願である。



客観的な句境

川柳指導講座「女親」

塚越正光

こんどの課題は「女親」といふのだが、女親とは自身の母に對していふのではない。自分の母なら母親とか母とか言ふべきで、母親といふ句語を使ふ場合は、客観的な句境第三者的な観方でなければならぬ。が然し本欄の作家に對してさうした作句態度を求めることは無理かも知れないが、よき作家たる心構えとして、如何なる課題に對しても課題そのものを一應検討して見るべきである。それはとりもなほさず、作品の對象なり、テーマなり、社會事象を凝視するよすがともならうといふものである。それが諸君の川柳眼を養ふに大きな力となるであらうことは論を俟たない。さて、諸君の先輩はどういふ風に女親を川柳化してゐるか。書棚にある「川柳女性一萬句」(近藤飴ン坊纏)を繙いてみやう……この句集の母の項を見ると

女親そばで取りなす炭をつぎ 茶 人
馬鹿にされながら喜ぶ女親 乾 坤
灰いぢる姿に残る女親 紅の花
元日を座り疲れる女親 英之助
等が目につく。このどの句を見ても客観的な手法であることを明確によみとることが出来る。つまり私達の先輩は「女親」といふ文字の使ひ方を誤つては居ないのである。そして編者飴ン坊氏もちゃんとそのけぢめをつけて居ればこそ、これらの句を句集へ収録してゐるのでもある。

そこで今度は諸君の句だが、先輩の句に劣るからといって決して悲観するには及ばない。前掲の句にしても何百、何千と活字になつた句の中から選ばれたものなので、諸君

の句もやがて句集に選ばれるやうな進境を示すに相違ないのである。現にこの集句の中にもさうした場合、選ばれるべき運命を擔つてゐる句もあるのである。ではいつもの通り一句々々を檢討することにしよう。

重かりし丸帶 たらり女親

世の中にはだらしのない女も多いのだから、きちんとした女親のある反對に、だらしのない女親もあるに相違ないが、母とか女親とかいふものに對する川柳觀は、きちんとしてゐるのが多いのが通例である。それを破ることも川柳觀の是正にはなるが、この句にそこまでの意識は感じられない。そこで丸帶だらりからもう一步進めて

重かつた帯に埋まる女親

と丸帶を解いてそのまゝそこに座つたのを、誇張してみるのも一つの手法である。(句主 岡山縣 美靜流君)

取越して苦勞に老ける女親

取越苦勞といふ成語を私達は持つてゐるのだから、それを驅使して

女親取越苦勞のみに老け

としたら形もとのひ口調もよくなる。(句主 兵庫縣 朔風君)

旅立へ又も念押す女親

女親のくどさを捉へたのは平凡ながらよい觀方である。そして随分苦心したらしいが

旅立へ又念を押す女親

としたら句形も口調もすんなりとすることに氣がつかなくなつたと思はれる。(句主 今治市向上庵君)

藪入り に女親の叱られもし

句主としては何故叱られたかと言ひたいのであらうし、又誰に叱られたかと言ひたかつたに相違ないが、意あつて力足らずといふところである。そこで私は

藪入りの子に叱られる女親

と叱る對手を點出して見たが、いつそ

藪入りに叱られもする女親

と句主の言はうとしてゐることのみにしてもいゝが、上五が人物とも時ともとれるので不可ないと思ふ。(句主 今治市 河鹿君)

母も死ぬ元氣のあつた若い頃

死ぬ元氣といふのへ想像を逞しふすることも出来るが、それより句主の説明に待つた方がよさ相である。(句主 神戸市 啓坊君)

誕生日わざ／＼母は知らせて來

この句材はどうしても女親では詠めないの、やはり母のまゝで

誕生日故郷の母から祝ひもの

とわざ／＼知らせることへ作意を用ひて見たが、句主はうなづけるかしら。そして故郷はくにと讀むことを言ひ添えやう。(句主 朝鮮バカチ君)

眞向に母をかざして言ひ切りし
兒の事になれば負けない母であり

前號にもちよつとお断りして置いたが、この二句は、前句と同一句主と認めて何にも言はないことにする。これは私の骨惜みからではなく一人一句の原則を守つて貰ひたいからである。

出世すりやするて氣を揉む女親

苦勞性は女親の通有性だから不可ないといふのではなくこれをもう一步突込んで貰はなければ、川柳する價値がないと言ふのである。前掲の朔風君の句並びに後出の春巢君の句を參考とすることをすゝめて責をふさぐことにする。

(句主 兵庫晋天君)

モダンな子親は片親女親

この頃流行る流行歌の一章を借りて來たやうなこの句に接して、沈思黙考稍久しだつたが、私はついにペンを投げの他はなかつたといふのが一度は

モダンな娘親は片親女親

として見たのだが、これで川柳になつてゐると私には言ひ切れないからである。それは本質的に流行歌と川柳の差が物語つてゐるのである。流行歌から川柳味を發見することは出來ても、流行歌は川柳ではあり得ない。(句主 神戸市奈落君)

女親論す言葉が愚痴に

市井の雜事から女親を點出することは本欄の句主としては最も手近であるが、論す言葉といふのは何となく緊迫感がない。そこで

女親叱言がいつか愚痴になり

と論す言葉を強調してみたが、ありふれた所謂お座敷川柳になつて仕舞つたやうである。お座敷川柳とは誰にでも作れて何處にでもあるやうな句のことで、諸君はさういふ句の作家になつ仕舞つてはいけないといふ見本にして置かう

(句主 大阪市淡路坊君)

お百度の願もいとはず女親

お百度といへば願がけすることを意味するのだから、願は不要になる。たつた十七字しかないと思つたら、無用の閑文字などは使つては居られなくなる。そこで

雪の夜のお百度も踏む女親

とその情景をまで描くことも出来ることを知つて貰ふことも無駄ではないと思ふ。(句主 大阪市龍城君)

女親返つて氣丈な子を育て

この場合の返つては反つての書き誤りと思ふが、それにしてもこの反つては句主の捨てきれない所ではあらうが、聲調をととのへる上から邪魔になるので

片親になりて氣丈な子の育ち

と子供へ焦點を置いて見たが、片親では女親だか男親だか不明だといふ苦情が出さうである。(句主 岡谷市幹君)

内職の子の成長を女親
句主の言はうとしてゐることはよく解つてゐるのだが、
これでは誰でもをうなづかせることは出来ない。なまじ無
理に女親を句面に表はさなくとも

内職に子の成長を待ちつづけ
といふ表現の仕方もあるが、それでは恐らく承服出来なかつたのかも知れない。(句主 大阪市登柳君)

行路難とは山あり川ありの昔の旅の苦しさから、轉じて
世渡りの難しさを謂ふのだが、そこから女親を思ひ出すのは聯想が飛躍し過ぎて、句主の獨斷としか感じられない。
むしろ

行路難元氣な母が居て呉れる
行路難元氣な母に勵まされ

の如くに實際問題化した方が句になる。(句主 高松市柳夢君)
泣き聲へ結びかけて来る女親
子を思ふ親心を擱んで居ることは確實であるが、第三者
の觀方とすれば

泣聲へ結びかけて出る女親
とすべきである。(句主 徳島縣芳泉君)

母の背の頃を想ふた鯉轍

何故茲へ鯉轍が突如として出現したかが不明である。季節
外れの鯉轍が出現するにはそれだけの條件がなければなら
ない。この句からそれは感じられない。ところが

鯉轍から母の背の暖か味

とすれば母の背に負はれた頃を思ひ出した感慨といふことが
解される。これは言葉の持つ不思議な力の作用によつて
感じ方が違ふのである。(句主 神戸市静水君)

あげられた少年に母はなし

これをもう少し具體化し十七字にまとめてみて
あげられた不良に女親はなし

では社会面の標題でしかない。況んや原句はどうにもなら
ない。同一人だか兄弟だか知らないが、後出の石燈籠君の
句を參考にすることをすゝめる。萬一同一人だつたら今後
は規定を守つて貰ひたい。(句主 朝鮮賦坊君)

女親優しく叱つて買つてくれ

冒頭にこの課題の意味を述べたが、その意味に於てこの
句は

女親優しく叱り買つてやり

とすれば體を爲すが、句としては價値のないものと言はね
ばならない。(句主 神戸市深君)

女親まだく死ぬぬ慾を言ひ

この女親には必然性がない。例へば「男親まだく死ぬ
ぬ慾を言ひ」でもよい譯である。本欄の作家にそれを求め
ることは無理かも知れないが、然りとて句型がととのつて
ゐるこの句主には、それを言はない譯にはいかない。敢て
添削を要さぬ分へ加へぬのは左様した理由からである。
(句主 大阪市水坊君)

以下に記す四句はこの指導講座を卒業してもよいとする
作品で、この四句がいつも斯ういふ句境を保持されること
を切望する。

女親裏へ廻つて逢つてやり
暖かい手が瘦せてゐる女親
萬一の一を案じる女親
仕送りをみんな貯めてる女親
石燈籠
悲戀坊
春巢
水

川柳塔

路 郎 選



行き詰つたらしい女が惚れて来て

大阪 西田 艸樂

あんなのが俺の姿かたいこもち

同

銀狐破鏡以来の毛がもつれ

同

お参りに行くのが人をつきとばし

同

丸髻もにあふぞ天氣ださあいこう

同

盆栽の梅は仕様ことなしに咲き

同

ひとの金借りに手土産などをもち

同

藝者連れてパン嚙り来る喫茶店

大阪 後藤 青兒

歸省して (二句)

植林地七十越した身で指圖

同

歳末の風寒くした社會鍋

同

圍爐裡の火幼い頃の癖を聞く

同

内科外科耳鼻咽喉と並ぶ驛

同

一生の願ひと言うは銀狐

名古屋 吉田 水車

アドバルンくらげの型で風に揺れ

兵庫縣 長崎 柳秀

よせ書へ雛妓なんぎな聲をあげ

同

片便り彼岸櫻が淋しうて

大阪 麻生 霞乃

餅箱になつかしう見る父の文字

同

鳳仙花竿のしづくのかかるとこ

同

幾代も暮す心算か家を建て

同

鬼蘇蝶々に痛いところだらけ

同

天職として正月を働けり

大阪府

宮岡 白峰

貧しさの子供を叱る事が出来

大阪府

妹尾 變人

支拂うて貰うは利子の利子の利子

同

日曜を働く父へ追ひすがり

同

謹みて酔うて安全地帯で寝

同

新任の眼にタイピスト斜を向き

大阪府

朝田 新水

飛び込めば人間共の壁があり

同

新世帯隣から来た油虫

同

制服のやゝ昂奮を感じたり

兵庫県

水谷 鮎美

歌舞伎座をホースで洗ふ大晦日

大阪

須崎 豆秋

お光りが消えて阿彌陀のくすぼりぬ

同

正月をしに戻つたか薪を割り

同

まごころの白紙のままをわたすなり

同

名が賣れてもう淺草に用はなし

朝鮮

池田 可宵

茶屋の春馬鹿なお客にかぞへられ

大阪

姫田 夕鐘

小寒と云ふ日に牛の涎折れ

大阪

橋本 緑雨

初姿腰の線から見詰められ

同

朝霧に満員バスを見逃せり

同

餅花の千兩箱の下で寝る

同

千日は肩を並べて行けぬとこ

東京

福田山雨樓

交通巡查おこり乍らに青を出し

神戸

西村 明珠

四十てふ元日の手を見つめたり

金澤

安川久流美

見送りの母は近所へうれしさう

同

三人の子の個性見て生きてゐる

今治

月原 宵明

うなづいてやれる間があるお正月

同

子が寄つて脱がす年賀のモーニング

高知

中澤 濁水



行 路 集

(2)

長 野 晴 濱

二 十 四 時

一日は二十四時より多からず書けば読み得ず読めば書き得ず
勤めつゝ讀みつ學びつ書くべしは二十四時間あまり少かり
一日が四十八時にありたらばなど口ぐせに言ひも出でつゝ

或る學生に

親の脛國の脛までかじりつゝなほ勉學を厭ひたまふや
三年の五年六年の青春を君むだにとはなし給ふにや
同年の大多數者は働きて働くがゆゑに苦しみてあるぞ

秋 晴

何とまあよく晴れた日ぞ出勤の道にはあれどちと散歩せん
秋晴や會社に着かば先づ一つ今の氣持歌にとはせん

引字生と氏彼



朝大え迎を友柳の來遠晩の戎宵で催主の社本
 句本たい開を庭句春新なかやごなで堂講大の
 字生」郎路の「氏彼」は選で題兼の夜當は稿
 表發で號次は題席樂紳の「引

ポinasへ後を見せぬい、彼氏
 寶塚 彼氏 案外氣が弱し 友帆 紳人木
 左様ならもきかずに彼氏うつちやれ 杜若 紳人木
 誘はれる度に彼氏は奢る役 彩泡 豆秋
 十二貫フラットと言ふ彼氏にて 星水 南濃路
 虚榮心 彼氏懲役二年也 龍城 霞仙洞
 縫紋の彼氏と二本だけ呑んで かほる 愛二
 傳票の裏へ彼氏と逢ふ時間 鈴の家 聞路
 一寸した彼氏の癖も覺へとき 白柳子 眞砂
 ステツキもたせて見たい彼氏の手 子鬼 亂耽
 會ふ日だけ彼氏「光」をすふときめ 白柳子 眞砂
 續編を彼氏に返す月曜日 沐天 龍城
 父さんの様な彼氏と住み馴れる 眞砂 眞砂
 待つ身にはなるな彼氏へ橋の風 喜山 眞砂
 テリヤもう彼氏の聲を知つてゐる 豆秋 眞砂
 満員の中で彼氏のを編み 友帆 眞砂
 彼氏にも見えすバトロンにも見えす 彩泡 眞砂
 さて金となつて彼氏も肯んぜず 珍竹林 眞砂
 服装の事も彼氏と打合せ 翠陽 眞砂
 (人)週刊朝日彼氏の朝の折かばん 珍竹林 眞砂
 (地)彼氏なぞと呼んでは戀を弄び 東魚 眞砂
 (天)心臓の強い彼氏を持てあまし 東魚 眞砂

☆

生字引些細なことも頼まれる 霞仙洞
 生字引又も床屋を陽氣にし 新水
 その椅子で腐らされてる 生字引 黙平
 生字引コンニャクと言ふ字を問はれ 豆秋
 生字引困つた顔もあつてよし 南濃路
 ボケットの煙管取り出す 生字引 聞路
 生字引眉をひらくと引受ける 霞仙洞
 大丈夫つながらる筈の 生字引 愛二
 生き字引女房に一矢むくいられ 眞砂
 生字引山羊にも似たる髯の主 杜若
 生字引綽名を三つぐらゐ持ち 亂耽
 生字引飲めば手當の愚痴となり 龍城
 生字引社寶の如く四十年 星水
 生字引だん／＼年を取るばかり 今雨
 東京で夢がくすれた 生字引 朔風
 出世する野心も無くて 生字引 ひろし
 停年をちと延ばされる 生字引 紳人木
 (人)寂寥と居て 生字引チト猫背 東魚
 (地)眠つてる様に物言ふ 生字引 沐天
 (天)生字引それでおのれを慰める 六葉
 (軸)統領の器にあらず 生字引 紳樂

漫画ヤンション

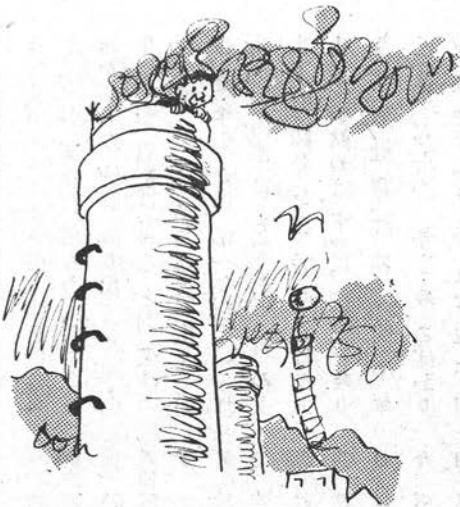
お手軽・避寒

漫画トリオ

小川 武
北 幹 夫
樋口ヒロム



↑ 一、春の宿
仲居「アレマア、お客さん風邪を引きますヨ、……お手軽だこま」(武)

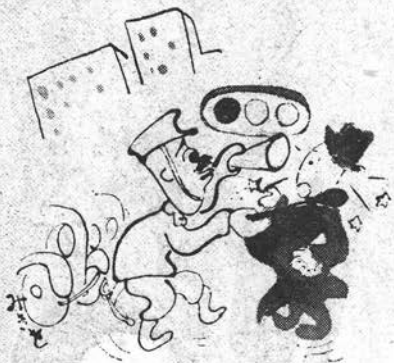


↑ 二、借金断り引受業
この商賣は高利貸をヤン／＼怒らしてその熱でアタママル、その上たまにはコーヒー位ありつけるこは……(北)

→ 三、避寒煙突男
避寒……悲カンと間違へん様に、彼氏「デモ、腰かであらうかな眺めぢやのう」(ヒ)

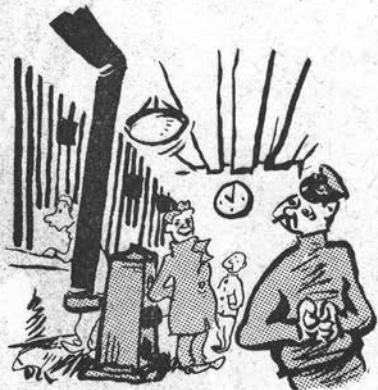
四、街頭利用法

(赤が出たらお歩きなさい)
ボリに必ず怒られる一顔から火が出て
シユンかんにアタママルです。(北)



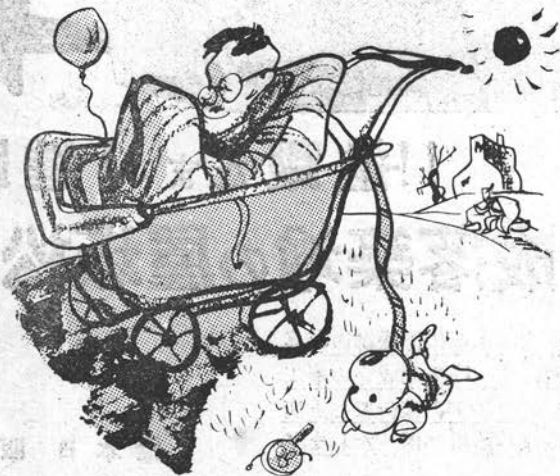
→ 五、銀行拜借!!

一萬圓程領金する顔してガンバルで
すな、金の音、豪華なストローブ、た
まにはギザ一枚位、拾へさうな気が
する。(ヒ)



六、物價騰貴の頃!

お天氣の好い日はこれに限る、但し山
の神にはナイショ。(武)





!!進躍たま！進躍

し近成落築増の屋坂松

期二第はに月三々愈くべふ應に顧愛御の年多
貨百大の一隨本日西に茲 げ告を成完の事工
なに事る得し果に分充を用御の様皆てしと店
°すま上希を顧愛御の驚倍卒何 たしまり

橋本日阪大



橋姫さん

縁切の神様

西田 艸樂

男が氣に入られば、二度でも三度でも女の方から、離婚訴訟を起しても、好む男の愛の生活へさ赴く事が近代的女性の權利の様に思はれる社會の一面があり、殊に歐米の女尊男卑の風習が、彼様な問題で一國を騒がす例さへあつたのに、さすがにものがたい日本婦人はまだく離婚さといふ事をそう手軽に考へてゐないのは、東洋の良風美俗といはればならぬ。

橋姫さん

この東洋の良風美俗が、極端な壓制のもとに守られた事は、鎖國政事の時代の事で、近代ではその牙城は既に崩壊してゐる。「貞節は兩夫に見えず」「女子には別に主君なし、夫を主人さ思ひ敬ひ慎みて事ふべし」などと婦徳の最高位に置いて教へて來た昔は、妻たるものは愛の伴侶さといふ事よりは、主に對する従の位置に置かれた。二夫に見えざる教へさ主従關係の極端な嚴格

は、相俟つて一度嫁した以上は、愛の伴侶としての權利は與へられず、夫の意志のみに服従さされ、虐待を受けやうさ、男の亂行に偶はうさ、よく堪え忍んで、妻の方から三下り半を請求するなんて事は出来なかつた。

「唐も日本も一旦嫁にやつた娘、嫁はれやうが如何せうが、男から逐ひ出すまで取戻すといふわけは無い筈、こりや宗岸の一生の仕損ひ」と「艶容女舞衣」の酒屋の段で父が言ひ、「添ひ臥しは叶はずさ」と娘がかきくごき、親も、娘も結婚と同時にペタ・ハーフを押賣する所存なんかはない。かうした時代ださて、やはり女も人間だ。堪え難き苦痛がいつまで辛抱が出来やう、この人と別れさへすれば、此の家を出て行きさへすれば、たごへ三界に家なしといは

れる女さて、又晴天が仰がれやうさ悶へた末が、表沙汰のお奉行所へ出ては成就も見込みは薄く、そこで、古川柳で賑やかな鎌倉松ヶ岡さ板橋の榎木が繁昌した。

榎では取れぬ去狀形で取り所謂縁切寺、鎌倉松ヶ岡の東慶寺は、北條時宗の末亡人が剃髮してこの寺に入り、覺山禪尼と稱し、出家の身さして、殊に女人さして何か世の爲になりたいさの所願から、子の貞時の諒解を得、朝廷の許しを得て、夫の邪慳非道に偶へる薄幸の女性を救ふべく、此寺に入らしめ、三年の間佛事修業をさせて、三下り半を要せず、自然情れない夫からの縁を切らせたのが、始りさいはれる。遠い松より榎へかけて見る

板橋の榎はその昔姫宮の御降嫁の際御通過になつた道中、板橋に榎があつて、御降嫁間もなく御他界なされたさいふ風な事があり、諸説粉々たる中に、その榎が縁切榎ださ後の世に信ぜられた事だけはたしかな事實で、

板橋の榎出る氣になるさきなり

板橋の榎さ女房心づき

板橋の木皮の能は醫書に洩れさ詠まれ、その木の皮を削り、水又は酒に混ぜて相手に飲ませれば必ず縁が切れるさ信じた。

生木裂く願は榎の皮をむき

の類の古句が澤山ある所以である。縁切寺には松ヶ岡の外に上野國勢田郡新



まがづつく・べつち

麻生 葭乃

あんまり無口なのも親しみ悪いが奥底にない事を捲し立てるのも疎ましいものである。こんな事を考へると私は益々日常茶飯事の挨拶にまで、右すべきか、左すべきかに迷はされるのである。

假に、途中で人に遇つた場合、唯「今日は」と云つても挨拶であれば「どちらへ」と訊くのも挨拶である。「やあ」とか「まあ」とか、あつさり片づける方法もあれば、相手に一言も切込まない位流暢に、時候の移り變りから、無沙汰の詫、向ふの肥えた事、こちらの瘦せた事序に家のごた／＼まで一遍にぶちまける法もある。

お互に敬ひ合ひ、親しみ合ふ事が挨拶の目的であるならば、餘程、相手の氣持を呑込んでかゝらなければ

到底、相手に親しみを感ぜさせる事は出来ないのである。商人には商人の軽さで、學生には書生氣質で呼びかけるのが、ほんとの挨拶であらうと考へるのであるが、そんな事はあらゆる階級の社會を通り抜けて來た通人でなければ、手際よくやり終うせない藝當である。

私のやうな者は、正真正銘、何處を叩いても、そんな魅力のある挨拶の出やう管がないと諦めてゐる。第一、相手を意識せねばならん事からして私の一番肩の凝る仕事である。日本人に生れて、日本語さへ適切に使ひこなせない私が、ま／＼と無傷なワン・センチンスを發見し、扱てそれを無調法な口から吐き出さねばならん時に、まだ、其上に先方の性格まで考慮に入れなければならな

田庄に滿徳寺さいふのもあつたのであるが此の寺は、大正十九年に創建された尼寺で新田季の息女が淨院尼とて開山、後世新田氏の末孫徳川家の息女が累代相續する家でこゝも二三年入つて佛事修業すれば縁が切れる事になつてゐたが、こゝは嚴格に落飾し尼僧となりすまふ必要があり松ヶ岡の方は只驅込みさへすれば、剃髮せすとも兩三年の寺院生活をすればよく、寺の方でも驅込みさへすれば剃髮せすとも兩三年の寺院生活をすればよく、寺の方でも驅込んで來た以上、無法な男が追かけて來ても何さか、けりをつけてやつた風で滿徳寺の方とはよほど手續が簡便、只江戸から三里の道と六郷の渡場が臆却な位なもので去り狀を有髮の尼になつてさり

さある如く、將來の望みもあつたから自然この方が繁昌したらしく、滿徳寺を詠んだ古川柳は寡聞にして見當らぬのか、事實あまり、はやらなかつたのではないか？
さにかく、お呪ひの檀の皮を信じたり二三年の寺院生活をも厭はず、切れたじ縁をもてあましたは昔の事さ、今時笑へない事實があるのを私は、次に述べやうと思ふ。
生玉神社の表門約一丁程の東に、持明院さいふ寺がある。門を潜つてすぐ右手十間程も行くさ、一字の社がある。細長い提灯が一ぱいぶら下つてゐる社殿を覗くと橋姫大明神と額が揚つてあり、種々の供物がしてあつて、中々繁昌らしい氣色である。三

つたり、其場の雰圍氣を見渡さなければならなかつたりする事は、私にとつては、拷問にも等しい責苦であると考へるのである。世間並の挨拶は、作句以上にむつかしいものであるのに、ふつと眼が覺めたら、實際雀が鳴かぬ日はあつても、此挨拶せぬに合はない日はないのである。

世間並の挨拶が面倒だからと云つて、山奥へ遁れて、蕨でも嚙つてゐたら、屹度、又世間並の五月蠅さが生む文明の利器をありがたがるに相違なからう。又、社會の一員として生存してゐる限り、遁世は卑怯な振舞でもあるし、假令僅かでも腰を掛けさせて貰つてゐれば、お役目も果さなければならぬとも考へてゐるので、私は極めて巧利的な方法を案出した。それは唯私の腦のスキツチを切變へさへすれば、忽ちにして現れるマヂツク・ベッドなのである。マヂツク・ベッドは靜かである。私一人限りである。

雨が降つて花が咲いた。風が吹いて花粉が散つた。人間の感情もその通り、自然の力に觸れて絶えず動い

てゐる。人間の思想も摸みなく流れてゐる。其流が廣々とした大洋へ押し流される時には、昔は山肌をつたつて居た清水であつた事を忘れ果てゝゐるかも知れないのである。私は刻々に移つて行くその心の姿を永遠に葬つて終ひたくはないのである。

洋装をした時に、浴衣を着た時に寫眞を撮ると同じ氣持で、私は作句精進を續けてゐる。誰にたのまれて作つてゐるのでもなければ、當込みの句を製造してゐるわけでもない。勿論健吟家を誇る野心は更でない。只、私には句を楽しみ合ふといふ一つの慾望があるのみである。

人の句を楽しむと云ふ事は、自分の心にハーモニーする樂器を探し求むる慾望ではないだらうか。自分の句境が木管樂器である場合、勢、絃樂器を求める傾向もあるであらうが又他の管樂器ともよくハーモニーする事もあるのである。日本全國川柳家の眞面目な作句精進こそは、虚空に渦巻く、香り高きグラランド・バンドであると考へられるのである。

十前後の婦人さ五十近い婦人が、一心に掌を合して拜んでゐる。あたりを見廻すさ兩側の堂の壁に、「御禮一圓也丑年女」「御禮二圓也末の歳女」といつた半紙に書いたものが十枚ばかりもはりつけてある。その横手に小さな紙に、

「當年廿五才丑ノ年女チ二週間内ニナニトソキツテグダサイオネガイマウジマス」

「縁を切らせ下さい四十八才子女、五十一才酉男」といつた貼紙がしてあり、黒塗の短冊形の板に二圓、三圓、五圓と叶へて貰つた人々の禮が掛けてあり、人生葛藤をまさぐ／＼見せつけられた氣がして、氣持が悪く感じた。

そこへお願をかける者は、詳しくは聞く勇氣がなかつたが、先づお寺へ頼んで一週間かの祈禱をして貰ひ、御符を戴いて歸つてそれを相手に悟られぬ様に食物の中に入れて喰べさせ、きつさ縁が切れる事請合だそうで、その必要もない私は信じる氣にもなれないが、色街方面では篤信の人が多いらしい。

今時こんな事をしてでも縁を切られなければ社會がある事、その御禮として上げてある願者が見るさ、四十歳代から下の女が九割を締め、稀に男の祈願者のある事などを見て好いた惚れたの未が、こんな事になる人の世が、恐ろしくなつた。と同時に松ヶ岡、縁切榎の音の眞剣さが手に取る如く想像された。

川・柳・書・架 (六三)

川柳夢路集

小田夢路著

▲本書の巻頭には食滿南北

岸本水府兩氏の序に次い

で著者の序がある。

▲巻末に「私の柳歴」と「句

集になるまで」の記事が

掲げられてある。

▲本句集に收むる句一千百

十九

▲昭和十二年一月一日發行

四六版二二〇頁、定價一

圓五十錢、著者廣島市西

新町一〇七小田夢路、發

行所大阪市北區堂島北町

一六番傘川柳社

▲著者は多作家として知ら

れた人、現在は「番傘」

誌上で川柳相談所欄を受

持つてゐる。



腕力

一路集

募集句

西村明珠選

言ひ勝つて上級生になぐられる淡路坊
腕力になりそうなのへ爛がつき曉堂
腕力へ 男氣強く買つて出る 溟二
腕力で 横車をば 押して行き 柳夢
腕力で 丁稚の口は 封じられ 形水
腕力も 非力の顎に 使はれる 文庫
腕力も 金も勝てない戀敵 大溪水

腕力を買はれ社長と同車する 琴風
日に焦けた腕に自慢の力こぶ 砂丘
腕力の圏外に居るウエトレス 美知夫
腕力もい、がと軽くおさへられ 悪源太
腕力の順を亂したイロハ順 章泉
腕力を怒りきれない女の瞳 水客
腕力に 決は撲つた方に罪があり 兄
腕力に 兄

腕力の下に女は子を庇ひ 變人
腕力をなじる女給の座談會 舞蝶
腕力がものを言はない留置場 東狂子
腕力へ月が笑つた様に見え 岩石
腕力持つて門衛老けて居る 其奥
腕力の恐さに自我を投げさゝれ 久米雄
腕力をさげすむ煙突とはなりぬ 縁吟洞
毆られた儘かと女房齒がゆがり 芳泉
鐵拳の雨に晴れてるボブラの樹木 履
腕力に 遠く及ばぬ過去を持ち 同
腕力に 馴れくしくもやつて來る 新水
腕力に 又何事か云はんとす 同
腕力の眞上におはす阿彌陀さま 縁吟洞
腕力を 信じる年が過ぎて行き 久米雄
腕力に 勝つて淋しい影法師 芳泉

い の ち あ る 句 を 創 れ

各地柳壇

規 清 投 稿

- 一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
- 二、文字正確明瞭に記載のこと
- 三、開催月日及場所記入のこと
- 四、締切は毎月廿五日とす
- 五、投稿先は本社宛

川雑京阪神各支部聯合主催 忘年川柳大會

十二月十三日夜 於日本橋俱樂部
兼題「髭」路即師選は前號發表
兼題「炭俵」並席題は左に掲げる事とし
た。(情況其他前號參照)

炭俵 (綠雨選) 人相 (霞乃選) 光 (溪花坊氏選) 請求書 (紳樂選) 首 (鮎美選) 漫談 (亂歌選) 煩冠り (春秋選)
炭俵 池田の土が着いてくる かほろ
炭俵 兎に角御膳片附ける 悟郎
宿直が口を切らした炭俵 蝶之助
炭俵 春遠からぬ嵩になり 亂歌

炭俵 あつちへ寄せるは夫の用
炭俵 だんく横にたほされる
炭俵 一俵あげた詰所の火
炭俵 積んで日本の冬さなり
炭俵 時雨の庭へ届けられ
炭俵 こゝの生活の勝手口
引越しに少し残った炭俵
炭俵 ついでにあげて置き云ふ 十七夜月
結びたての蓄を氣にして炭俵
引越しのトラツクに積む炭俵
炭俵 燃えきるまでの賑やかさ
炭俵 夜勤巡查の脊が圓るい
愛し得ぬ惱みのまへ炭俵
待避線まだ炭俵續いて來
炭俵 二人は炭俵いなき思ひ
炭俵 軍手に輕うあしらはれ
お師匠の顔色を見る炭俵
裏口の雪をよこした炭俵

人相も師走の風もさがり切り
善人と云ふ人相に損をして
人相へ勿體らしく咳をする
人様のお子だ人相さがめまじ
人相見痛い所を云ひ當てる
人相で留守に受付してしまひ
人相を刑事は曇みかけて問ひ
人相の悪い男の足を踏み
たゞならぬ人相で出る電話室
微笑んでみても人相悪いこ
人相を誇る氣分の鼻を撫で
假謎のまづ人相が氣にかゝり
人相にとがった思想あからさま
人相は今頃樂になる時分
人相へ刑事度胸を決めかゝり
上畑屋この人相へ氣を合はし
人相の悪るさ高座で鼻にかけ
天職にその人相が光つて來
島は風椿に月の冴えた夜
潔白が知れて嬉しい陽の光り
裁判長ダイヤの光り目にままり
光るもの競れば師走のアスハルト
フラツシユヘターキー慣れた瞳で笑ひ
うす暗い光に住んで錢を貯め
太陽へ見直して見る阿彌陀さま
善人の見直して見る黒ダイヤ
足並を揃へて光の中をゆく
冬の風鐘詰屋だけよく光り

八歩 變人 彩池 夢裡 葉平 黙平 十字路 ライト 秋無草 菊人 秋無草 靜路 羊ノ助 水染 蝶之助 桂三 南濃路 柳笑 聞路 黙平 十九緒 秋無草 靜路 南濃路 結水 新水

寢不足へ朝の光が目にしみて
御來光卷ゲートルはシャンミ立ち
愛人のカメラ嬉しう光るなり
光るものみんな光つて自家用車
手の筋の垢るうそくの灯の光
大阪の光の底で墮落する
もう餘程ライトに慣れたエキストラ
眞劍の光さなりし座彈の陽
朝の光が心臓にこだまする
極樂の光屏風の上をさし
陽の光眞向からの鍬をふり
死の一步でまへに光なむれたり
太陽の光に嘘むごもるなり
請求書女將の世辭に拂はされ
請求書幹事の豫算狂はせる
請求書米屋信用して歸り
請求書案内飲んだ事を知り
請求書先づ縮高を先に見る
御機嫌を取つて差し出す請求書
請求書覺悟してゐた事ながら
請求書そへて幹事は集合し
ポーナスへ請求書ためてゐる
請求書赤鉛筆で值切られる
拂へないついでで見る請求書
簡單に前月分と請求書
名洒落も出す請求書じつを見る
辯護士のちゑ借りに来る請求書
直接に貰ふ祕密の請求書

ライト
吞々子
菊人
同
天國
某人
十字路
鮎美
不角
白柳子
水洋
鮎美
靜波
十九緒
靜路
不凡
美智夫
彩泡
柳笑
緩勾配
吞々子
一生
白柳子
みつる
澄風
斗風
白峯
柳笑

請求書米屋の分は拂つごき
請求書きつちり半端れざられる
其の中にて人の行かぬ請求書
請求書かへらぬ愚痴をくりかへし
請求書ホケツで指をおつてみる
請求書の束に驚く國の母
いのですげご置いてく請求書
請求書だけは氣輕に受けて置き
近所だけ拂ふご決めた請求書
請求書初手はきつちり拂てやり
請求書たしかに呑んだ覺えあり
請求書ポーナスはもうとんで居る
請求書みんなとれたらなご思ひ
請求書皮算用に近いなり
請求書裏へ廻つて待たされる
請求書チップをのせて返される
請求書旅の歸りを待ちわびる
請求書知らん顔して置いてゆき
人生を割切つてくる請求書
首に珠數かけて小さな嘘が云へ
感心をした表情は首を振り
他人の首心易うに言つてのけ
素首の一つが男狂るはせる
反抗のつもり被告は首をあげ
銀狐巻いて優超感の首
首のない人形があめにぬれてゐる
首振つて肩のこつてる親且那

岩石
彩泡
世間音
變人
遊歩
幸捐
其奥
鐵心
秋生
靜波
夜王
つとむ
明珠
破鼓
翔林
紫香
双葉子
豆秋
不角
水染
靜城
其奥
羊之助
雨少
一途
靜路
遊歩
閑路

首切つた話滿洲から除隊
我ながら安い首だご思ふなり
午前九時首のそろつたペンを取り
細い首してカステラをみんな喰べ
女湯を首すげかへた様に出る
首の線冷たき煙草吸ふ
首を切る約束をする日本人
秀才の首の細さが目立つて來
前の人の首を見てゐる淋しい日
昂奮がない漫談の膝まるし
漫談を一寸まねてゐる純喫茶
漫談へうまいですナと欠伸する
漫談が何時か社長の立志傳
漫談の好きな二人に判る洒落
漫談が一寸悲劇にふれてくる
漫談へマイクの位置が近すぎる
漫談へ無口な一人旅をつぎ
漫談へこそばゆくなる若夫婦
九里丸に教へられてゐる十二月
粹人の意見漫談ふて來る
大金の話漫談ふて詰り
漫談の顔はたばこを喫ひたそう
ボケツトをこそくさぐる漫談家
相手は女です美人ですと漫談家
頼冠りした儘嫁に肩うたせ
ふるさこの土がうれしい頬かむり
落ちてゆく姿なつた頬かむり

十九緒
勝太郎
八歩
不凡
三猿子
亂耽
緩勾配
悟耶
天國
鮎美
佐太郎
樂天子
鐵心
鐵心
彩泡
艸樂
鐵心
世間音
朴堂
緩勾配
菊人
禮人
某人
かほる
天國
春秋
朔風
八歩
靜路

各 地 柳 境

かけもちの仲居は好きなどこで酔ひ
月水金治療をします出張所
かけもちの仲居合 槌打つて立ち
かけもちの舞臺 順番狂ふなり 極
かけもちへ二度目の電話かゝつて來同
兼職の方は判だけ押しして無事大

かけもち
酒井大 樓 報

川柳 松山句會 (松山)
十一月十日 於晴明食堂

世の裏へ落ちまいハンコ握り締め 三雷波
女學生時代の服で 大掃除 都之介
神棚の掃除 繁昌し さうなり 三雷波
後足で掃除 夫犬を 叱りつけ 都々介
耳掃除 恩給がある 十二月 三雷波
嘘ついて來た 嘘のさきの虹の橋 臈人
虹は七色の嘘が 待つ奴郎 庄介
嘘つけば嘘の心 待つてゐる 三雷波
借金へあの術この術を考へる 窓鬼
嘘言つて俯向いて居れば 濟むんです 山川兒
本當の事ださ嘘を吐いてゐる 絃 耳
子供指くわへて嘘のない姿 笑 鬼
きれいなひさのきれいなうそだつたよ 夢 迷
行き先を告げずに 娼婦それつきり 一湖
晝の娼婦の 江戸川 亂歩集 山川兒
娼婦さば見せまい晝の廓を出る 三雷波

誕生日 便所
誕生日の鯛に一人子病んでゐる
誕生日父親だけが酔ふてゐる
弟が威張つて戻る誕生日
便所から見る飛行機の早すぎる
WC子供を抱いて待たされる
姑の愚痴便所までつゞき

誕生日 便所
宮岡白峯 報

川柳 鶴町句會 (大阪)
十二月二日午後六時 於ライト居

川柳 梅田句會 (大阪)
十二月三日 於由布居 田邊由布報
外套、戀
外套を着て嫌がる男の子
外套を忘れた子等を母案じ
外套に南京豆のある若さ
外套で逢へばボタンをいぢるだけ
青春を包む外套の金ボタン
外套のボタンきつちり惚れられる
ポナスを飲んだ外套の着やうかな
灯にそむく外套の肩のとがりたる
外套の端山茶花のはなにふれ
本當の戀かすげなくしたくなり
引潮の汀の戀にカニが逃げ
北風(戀)の散歩の二人きり
片戀の壁におれたる影法師

小柳子
岩石
變入
秋月
ライト
石
私生活案外地味な六代目
私さばつきり云へぬ國なまり
私を捨てた勇士は祀られる
金持って私事が多すぎる
私でなくてよかつた金の事
悟れ、さ私の心へ呼びかける
大都會私一人をもてあまし
片思ひ私信淋しき日の机

私、鼠、買物、社會面、面倒、懐手
奈 落 報

川柳 岬柳社句會 (兵庫)
十二月十六日 於和田宮通衛生事務所

川柳 尼崎句會 (尼崎)
十一月三十日 於住友伸銅工業所
橋本路 風 報
誘惑の痴慧は便所の中へ出る
肉親の愛を便所で知る日なり
變人
ハシカチ、驛辨
ハシカチのハシカチ鼻もかまれてる
ハシカチに女笑をこぼしたり
硝子戸へハシカチ貼つて下宿を出
ハシカチにサインがあつて取取つて
ハシカチを振れば別れさ見てしま
松茸のある驛辨に山が見え
驛辨に新郎嬉しく使はれる
トネルに入り驛辨の手をやすめ



柳界展望

催し

▲「川・雜」の新春川柳會は一月九日夜、大阪朝日新聞社三階大廣間で開催、講演「新年吟に就いて」路郎師、「スポーツ川柳を語る」東魚氏の熱演あり遙々來阪の周魚氏の挨拶あり、マサカ・マンガ・トリオ同人の席上揮毫ありこの夜遠く東京の花戀坊、杜若、眞砂、艸人木、静岡の珍竹林、四郎次、石川の銀波樓、六葉、今雨、一瓢、鈴の家、ひろしの諸君の出席を得て新春句會に華を添へた。

全國川柳界のこゝ、各地川柳家の一舉手一投足をこの展望欄ですくわかる様にしたい。皆様の御通信を歓迎する。

▲一月十四日九天、久米雄君等（廣島）によつて廣鐵川柳新春句會が開催された。

▲一月十六日、大大阪川柳社の活字化第一回の句會が端の坊に於て開催、路郎師、水府、東魚の諸君、並びに最近復活された川柳家も交つて盛會だつた。

▲みずか川柳社（今治）では一月三日新春句會を開催された。

▲加能川柳社（金澤）では一月十六日の夜、川雜新春句會出席報告の小集を開催され諸君から寄書を頂く。

▲川柳求真會（東京）の新年大會は銀座裏のなかじまで開催され盛會であつた由。

▲川柳雜誌社今治支部（今治）の新年句會は一月五日に開催された。

▲川柳ビル社（京都）では一月十五日仲源寺で新年句會を開催された。

▲番傘川柳社（大阪）主催の二十五周年記念大會は一月十日中央公會堂で盛大に舉行された。

▲一月二十日夜川柳長生會（東京）の催で増田家に於て、啞三味、陣居、星文洞、車山、庸好兎猿子、山雨樓の諸君が一如庵花樵女史のサーピスで茶道に遊び、後膝を交へて柳論に花を咲かした由。

▲安川久流美君（金澤）は大晦日夜「川柳漫談」を放送された。

吟社の創立

▲一月十七日、伊豫新報社の後援で伊豫大洲町で川柳發會式が舉行され、松山から同新報社主筆西山鐵傘樓並びに前田五健、酒井大樓、芝田靈子の諸君が出席され、來會者廿餘名、鐵傘樓

氏の命名にて水郷川柳社と名付けられた由、御發展を祈る。

創刊と廢刊

▲潮田明坊君（姫路）によつて川柳誌「繁華街」の第一號が發刊された。

▲東京淀橋區東大久保二ノ九六に川柳眞珠會が創立し、柳誌「眞珠」の創刊第一號が發刊された。

▲柳澤花泪君（群馬）によつて川柳はながさ會が生れ川柳はながさの第一號が發刊された。

▲川柳風呂社（松江）の手によつて故美紗子女の句集「鈴」が發刊された。

消息

▲藤生路郎師は一月二十五日夜阪大川柳會に出席された。

▲鳥生枯拂君は今治醫備銀行に勤務されたが、一月廣島へ榮轉された由。

▲橋本綠雨君（大阪）は一月十五日京極の古川綠波一座の觀劇をされ、正月氣分を味はれた由

▲故今井卯木氏令息一郎君（横濱）は舊臘二十九日夜東魚君同伴で本社事務所を訪問、折から校正中の路郎師はタクシーを飛

ばして歸社珍客を迎へられた。廿日、廿一日の夜も遊びに見え一九三七年の元旦をキングで迎へ、三日は路郎師に伴はれて當百氏宅を訪はれ、當百氏味原の卯木舊跡を案内して、懷舊の情にひたられた由。

▲中西おさむ君(大阪)は天王寺病院に入院されてゐたが、一月廿日退院された。

▲山川一生君(大阪)はスキーをかついで十二月二十八日夜信州の池の平へ。

▲山本喜山君(大阪)は元日から別府に遊ばれ温泉に入るだけが仕事ですとのんびりした便りに接した。

▲村野東狂子君(朝鮮)は十年振りで東京でお正月を迎へられた由。

▲生田翠夢君(大阪)は一月五日南紀白濱に遊ばれたの事。

▲一月二日に事務所を訪れた住田亂耽君(兵庫)の話によれば四月頃はじめて父君になられる由スエヒロのテキでなければ承知の出来ない第二世?

▲川・雞新春句會に出席され窪田銀波樓君(金澤)から留守の間の積雪二尺尙チラチラ降りみ降

らすみの空模様今後いさゝか恐ろしいものがあります。そのお便りに接した。

▲同じく關本一瓢君(金澤)からも、歸られてから積雪に吃驚されたお葉書を頂く。

▲富士野鞍馬君(東京)は商用で北海道に赴かれ、「帝展の眞物を見る登別」の句を寄せられた

▲一月十一日夜馬場浪二君(丸亀)から長距離電話を頂いたが折から路郎師不在僅か數分ながら機見女と海を隔て、歡談した

▲櫻井六葉君(石川)は上阪されたを機會に一月十日夜十六七年振で脇田梅子女史に逢はれた由。

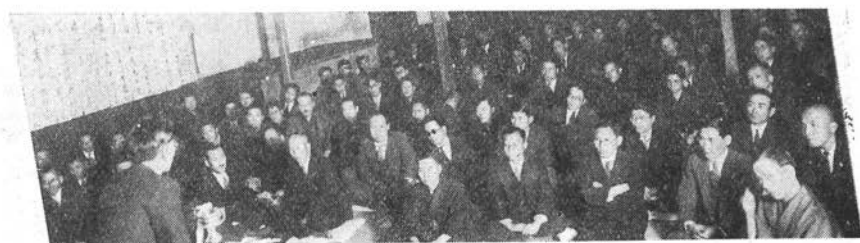
▲原史風君(大阪)は一月十四日商用で九州へ發たれ、別府からの旅だよりを頂く。

▲蛭子省二君(川協名譽會員)は元旦に發作のため五時間も苦しまれた由。御同情申上げる。

▲一月十八日朝田新水、川合舟々の二君は數人で伊勝參宮をされた。

▲吉川啞人君(山口)は十日全國交驛川柳大會に出席、久しぶりで路郎師と舊交を温められた。

▲化粧新聞の成川柳二君は舊冬



川・京阪各神支部聯合主催 忘年柳大會夜情景の一部

十二月末突然弘田病院に入院されたが、大分快方に向はれてゐるが一日も早く御快復を祈る

慶 弔

▲大西八歩君(大阪)は去る十二月十五日三年目に女子をもうけられ、お父さんとして初めてのお正月を迎へられた。

▲大阪形水君(大阪)の宅では一月十六日男兒出生、母子共に肥立よろしきこの便りを柳友啞鈍君から頂く。お喜び申上げる。

轉 居

▲勝山しとし君(石川縣小松町土居原町尾山屋旅館内へ) ▲市場没食子君(大阪市東成區中川町三〇二へ) ▲鳥生枯拂君(廣島市白島東中町六三藝備銀行寄宿舎内へ) ▲長島双亭君(東京市中野區中野驛前二一ノ八へ)

其の他

▲新生路郎師は誠文堂新光社發行の「廣告界」の文案研究特輯ペーシ「文案家は樂じやない」の執筆をされた。

▲尾崎方正博士は「臨床日本醫學」の第六卷第一號に、川柳漫評を執筆された。



横 縦 輯 編

- ▼ 莫迦に寒くても困まるが、變に暖かすぎてイヤなものだ。柳友諸兄の健康線に異状のないやう只管祈つて居る。
- ▼ 二月號はも少し早く出すつもりでゐたが、あちこちの會へ顔出しをしたり、俗用にバタバタとたりしてゐるうちに豫定に少しく狂ひが生じた。
- ▼ 「川柳塔」の人々を再び「近作柳椽」から分離した。尤も「川柳塔」の人で近作柳椽へも出した人は出したもいゝ程度の軽い規定にした。
- ▼ 山雨樓君から「東京と大阪」が届いた。謹嚴な同君としては珍らしく軽い筆である。
- ▼ 姪子省二氏から武玉川三篇研

究の正誤表をいただいた。病むをおしての研究だけに、こんな苦勞をかけて濟まないと思ふ。

▼ 頼原退藏氏から「武玉川三編 研究を讀む」をいただいた。研究の研究と云つた原稿である。

▼ 本月の「川・鶴の頁」へはカリペンツク貯金を提唱した。貯金の競技ではないがカリペンツク見物に出かけられない事情が出来ても損はないから、まアやつて見るのもいいだらう。

▼ たかを・あきを氏から「花街ルンペン」が届いた。記事を読むと、私も花街ルンペンのうちに交じつてゐるのだが、私は新世界の出雲屋で別れて、新年號の校正で夜明しをした。私は校正ルンペンだった。

▼ 塚越正光氏の「指道講座」は他誌に類例のない光り方だ。氏の熱心な指導振りに敬意を表す。

▼ マンガセクションは川柳と直接關係はないが續載することにした。柳誌だからと云ふのでビ

ンからキリまで川柳記事で埋めるのもどうかと思ふ。私は牡蠣は好きだが、蠣船の料理が、なんでもかでもカキが這入つてゐるのには閉口するタチなので、長野晴濱氏の「短歌」やたかを・あきを氏の隨筆も柳誌の臭味や單調さを破る點から御寄稿を願つてゐるのであるが、川柳さー

川柳指導講座

講師 塚越正光先生

課題 「サラリー」 一人一句

締切 二月末日

投句 本社宛「川柳指導講座

句稿」を明記する事

脈通じるところがありさへすればいゝと思つてゐる。

▼ 西田艸樂君は大阪での縁切の神様「橋姫さん」を書いてくれた。私もひまをぬすんで出かけた。私も思つてゐたが、艸樂君に先鞭をつけられた。

▼ 葎乃が久しぶりで筆を執つて「まちづく・ベツゴ」を書いた。

貧しい生活の中でノンビリと悠然と暮らしてゐる彼女の心境が判つて貰へるだらう。

▼ 「川柳雜誌」が大衆を目指して刊行を續ける限り私の「川柳名句評釋」は續けて見たいと思つてゐる。

▲ 姪子氏が「湯の村」で名句の文字について云々されてゐたが觀點の置きどころによれば、川柳に名句なしとも云へるし、名句一萬といふ云ひ方も出来る。見出しのこゝであるから讀ませるこゝも考慮に入れればならぬ。名句の中へ拙吟まで入れてゐる心臓の強さからでも、名句の文字の使用觀點はハッキリしてゐる筈だ。

▼ 誌代の切れた方はドシ／＼拂込んで欲しい。誌代と埃りは積らぬ方がいい。郵便局へ行くのが面倒だつたら切手でいゝさうだ。これは會計のお取次ぎ。

▼ 二月號より三月號さ一寸刻みによくするつもりだ。御支援御愛讀を乞ふ。(略)

(順はるい) 社關人の人々



川柳雜誌社

主幹 麻生路郎

藤原退藏 藤本卯之助 國枝史郎 長野晴濱 長岡半太郎 長崎柳秀二 田中辰純 嘉納路生 笠原直方 片岡一平 岡本弘雄 大田一雄 長谷川徹 池澤樂居

贊助員

赤井清司 末弘殿太郎 淺田大郎 赤井清司 伊藤彦造 鳥山一步 沖野岩三郎 大島濤明 大谷五花村 大西長三郎 小川武 龜井晟修 川上三太郎 川村花菱 川村あゐ馬

客員

田村孝之介 谷脇素文 生方敏郎 高尾亮雄 窪田銀波樓 安川久流美 前田雀郎 前田五健 食滿南北 柴谷幸二郎 篠原春雨 蛭子省二 藤里好古 小林不溟人 森東魚

支 部 と 幹 事

道頓堀支部(大阪市) 幹事 庄萬よし
 九三會支部(大阪市) 幹事 北山悟郎
 神戸支部(神戸市) 幹事 喜多春秋
 函館支部(函館市) 幹事 龜井辰修
 高知支部(高知市) 幹事 水谷春永
 梅田支部(大阪市) 幹事 國澤結水
 蟹ヶ池支部(大阪府) 幹事 水谷結水
 田邊支部(和歌山) 幹事 辻流之介
 笹川支部(島根縣) 幹事 尼左馬
 京都支部(京都市) 幹事 明石緑之助
 鳥取支部(鳥取市) 幹事 中島柳次
 松山支部(松山市) 幹事 酒井鐵大樓
 御旅支部(大阪市) 幹事 江戶みつる
 天王寺支部(大阪市) 幹事 宮岡豆腐秋
 鶴町支部(大阪市) 幹事 須崎白峰
 御池橋支部(大阪市) 幹事 西川いわ
 松江支部(松江市) 幹事 勝谷山川兒
 大鐵局支部(大阪市) 幹事 山本喜山
 西條支部(愛媛縣) 幹事 荒井英夫
 光輝支部(大阪市) 幹事 竹内機見女
 今里支部(大阪市) 幹事 市塲没食子
 上町支部(大阪市) 幹事 廣原都會人
 今治支部(今治市) 幹事 月原里十九
 光笑支部(鳥取縣) 幹事 永田里十九
 伯耆支部(廣島縣) 幹事 松井可美笑
 竹原支部(廣島縣) 幹事 三嶋美笑
 十三支部(大阪市) 幹事 宮野可美笑
 臺中支部(神戶市) 幹事 三宮野可美笑
 兵庫支部(神戶市) 幹事 陽幸

川・雑・案・内

六段活字十四行三行金五十換、一行増すご
 込に金十換、自由金切手代用可、一増すご
 取換、移轉、句會案内、柳書廣告、その他

1936年の

合本 (第十三卷)

を机上に備へて春を迎へま
 せう。

頒價金 參圓

送料 大阪市内一冊六錢
 市外一冊廿四錢御註文は川
 柳雜誌社へ(前金)

新技句用箋

御授吟用として感じのい、
 枳形川・雑・句・箋 が出来ま
 した。御利用下さい。

八十枚綴 一冊 金十五錢

御申込は川柳雜誌社へ

切手代用も可

路郎先生染筆

路郎先生筆、掛軸、横額小
 物、短冊を川柳家に限り左
 の通りで頒布致します

軸箱入二拾圓・額二拾圓
 小物五圓・短冊參圓

御込は前金で發行所へ

合本特賣

川柳雜誌の合本第二卷より
 第十卷まで

各一卷 金壹圓五十錢
 第十一卷及第十二卷 金參圓
 送料大阪市内 一冊六錢
 市外 一冊廿四錢

御申込は前金で川柳雜誌社へ

後の葉柳を頒つ

大正八年に出してゐた「後の
 葉柳」の残本が僅かばかり出
 て来たのでお頒ちします。日
 車、牛文錢、路郎の三氏の句
 しか載つてゐない枳形四頁も
 の全三部で十錢、二錢切五枚
 お送り下さつてもよろし。

川柳雜誌社宛

「川柳雜誌」

創刊號より十卷迄
 某氏の所有、希望
 者に安價に譲る

(姓名在社)

殘本分讓

川柳雜誌の殘本が少數宛あ
 りますので、左の通りで分
 讓申上ます

第二卷より第三卷迄 十五錢
 第四卷より第十一卷迄 一冊十錢
 第十二卷 (送料一冊一錢)
 御申込は前金で川柳雜誌社へ

懸賞川柳

課題「妾見」二月十日
 用紙は官製ハガキ(化粧柳壇
 志明記の事) 選者麻生路郎氏
 秀逸數句に薄謝を呈す
 宛先 大阪市西成區玉出本通
 三ノ三六 麻生路郎氏方
 化粧新聞社柳壇へ

川柳を作る人、愛好する人
 の必讀誌

川柳俱樂部

毎月一日發行
 一部廿錢・送料一錢
 東京市牛込區拂方町一四
 川柳俱樂部社

川上三太郎主宰
 (毎月一回發行)

川柳研究

一冊金廿錢
 一年金二圓
 異色ある本誌の創作欄を初心
 者への入門欄をアナタは絕對
 に見逃してはいけません
 見本希望者は二錢切手十枚同
 封左記へ
 東京市王子區上十條町八五〇
 發行所 川柳研究社

川柳きやり

菊判每號七十數頁
 毎月一日發行一部廿五錢
 東京豊島區高田本町二ノ一四
 六八
 川柳きやり吟社

番傘創刊廿五周年記念

主催 番傘川柳社

第三回 川柳趣味展覽會

二月九日より十四日まで

大阪三越七階催場

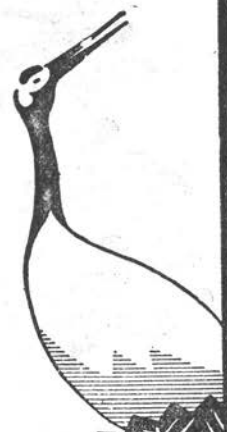
川柳廿五景の興味ある場面を中心に、貴重なる文献、寫真その他川柳に因む新製商品等
川柳趣味横溢の會場に、毎日新らしい課題により懸賞投句を募集し、入選を發表いたし
ます。是非御來觀を願ひます。

川柳に關する講演會（十一日午後八階ホール）

酒 白鶴 清



ハクツル



元發

嘉納合名會社

大阪・東京・神戸・京都・川仁・大連・奉天

手八丁も

はたっけんき
 膚劈くこの頃の寒さ
 には後びつしやり

家庭の整理ができない時です
 ムネタの炊事手袋は三面六臂で二
 本の手が十本にも働き、そうして
 白魚の指、子安貝の爪いつも美しく、
 アレズ、汚れず、ほかくと暖かいです

薬店百貨店にあり
 品切の節は本舗へ

メリヤス裏
 一組 一圓廿銭
 一號 薄手裏毛
 二號 一組 八十銭

メリヤス裏で暖かい

ムネタの炊事手袋



發賣元

ムネタ
 宗田新商店

大阪市東區道修町二
 電話北濱(四八六三)
 振替大阪四九八

片瀨醫學博士 推獎
片瀨醫學博士 監査

錠ムーエシルカダブ

安産

母性愛の達成へ

母性愛の發露たる妊娠は眞に女性にとつての重大任務であります。更にこれを達成せしめることはワダカルシユームの使命であります。即ち母体と胎兒の保護榮養に任じ、悪阻期を安全に経過せしめ、偶發する諸病を未然に防ぎ、子宮の收縮をよくする爲め安産せしめますから、お産の守護神として御信任を頂いてゐます。更に授乳期には、母乳を豊富にし、乳質を改善する外、母体の容貌、毛髮、齒牙の悪化を防止し、乳兒も随つて健やかに育成されますから、凡ゆる女性を則かな圓滿な家庭の人とします。

片瀨醫學博士述「安産のために」進呈

のために

代時ムーユシルカ てし設建を

茲に二十年、幾十萬の妊産婦諸姉が、「ワダカル」の偉力を禮讃せられつゝある事實と、我國カルシユーム學界の泰斗、大匠醫大教授片瀨博士の、二十年一日の如き熟慮と努力により、不滅の城域を築き得ました事は、弊店最大の誇とする處であります。

安産・安産・安産のために
「ワダカルシユーム錠」



大塚製薬株式会社 町修造取大

菊正宗

宮内省御用達

株式會社

本嘉納商店

投稿規定

- ▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。
- ▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。
- ▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
- ▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
- ▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」ご封筒に朱記の事
- ▲締切は嚴守されたし。
- ▲投稿其他につき御問合せはすべて返信封封入の事。

募 集

第十四卷第五號懸賞課題

三月一日締切

(十句以内)

浪人 小林不浪人 選
襟足 山本丹路 選

第十四卷第六號課題

四月一日締切

(十句以内)

袂 榎田珍竹林 選
食堂 永田里十九 選

每號募集

近作柳樽(十句) 麻生路郎 選
各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

懸賞句規定

- ▼天地人三位に粗品を呈す
- ▼一般懸賞歡迎

定 價

一 部 金三十錢
 一箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
 一箇年前金(特輯號共)三圓六十錢

廣 告 料

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます。但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し願ひます○御注文には何月號よりご御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十二年二月十日印刷

昭和十二年二月十五日發行

第十四卷 第二號 (毎月一回十五日發行)

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

編輯兼發行印刷人

麻生幸二郎

禁 無 斷 轉 載

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

川柳雜誌社

電話天下茶屋二五七九番 振替 欠帳七五〇五〇番

發行所

支社

支社

東京市蒲田町女塚町二〇三 川柳雜誌社東京支社

賣 捌 書 店

(大阪)大賣捌大賣書店 參文社 明文堂 廿他市内各書店
 (東京)丸の内東京堂 丸の内嚴松堂 丸の内吉岡書店 丸の内玉森堂 丸の内相伊國屋 丸の内三味堂(神戸) 米田、寶文館(函館) 石塚(京都) 三宅(名古屋) 靜觀堂

にきび
とり

美^び顔^が水^す

▲ニキビ吹出物に

第一等^{だいいち}の良薬^{りょうやく}!

ニキビ吹出物にこれ程よく効く薬はない
といはれ、種々な薬や方法で失望された
方でもこの薬の効能には満足されます。

▲美容薬として

この薬は美容薬としても非常に優れた効
果があり男子方にも婦人方にも広く常用
せられてゐます。



大正十三年三月三日
昭和十三年二月十日
印刷紙料未
（毎月一回十五日発行）
昭和十三年二月十五日発行

川柳雜誌

（第一五七號）

定價金參拾錢

送料壹錢